ラブライブリスタートシリーズ　ラブライブカーニバル

しゅみタロス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺は守りたい、皆の幸せ、叶えたい夢、俺の存在はそのためにあるから。」

神城寺高校（かみじょうじこうこう）の2年生の心咲護（しんざきまもる）は昔の幼馴染の高坂穂乃果と再会する。しかし穂乃果の通う学校が廃校になると聞き、穂乃果に学校を助けてほしいと言われる。これをきっかけに心咲はスクールアイドルの世界に仲間と共に入っていく。これは夢と恋をテーマにした青春ジュブナイルストーリー。

※初投稿です、素人が書いてるので変かもしれません

※アニメ版をベースにオリジナル展開があります。

※少しパロディ、軽いセクシャルシーンを含みます

以上の事が許される方のみ読んでください

目次

スピンオフ
【やりたかっただけスピンオフ】王都魔術捜査官園田海未 ―――― 1
シーズン1
第1話　始まりと春風の再会 ―― 8
第2話　力無き王 ―――― 11
第3話　好きの可能性 ―――― 15
第4話　運命交錯と王の旋律 ―― 19
第5話　願いの華 ―――― 24
第6話　舞姫鏡月 ―――― 28
第7話　哀無き空 ―――― 33
第8話　弱気な彼女も恋をする ―――― 38
第9話　全ては君への想いの為に ―――― 43
第10話　友達を助けるのに選択肢は必要なのか ―――― 48
第11話　合宿危うくも避けられぬ心 ―――― 59
第12話　不確定性感情論 ―――― 70
第13話　救済の女神 ―――― 79
シーズン2
第14話　夏の終わりと生徒手帳 ―――― 88
第15話　緋色の晩餐会 ―――― 96

第１６話　苦悩無き幸福　――――　104
第１７話　優しき吸血鬼と九人の魔女　――――　112
第１８話　想定外男子　――――　119
第１９話　心咲としての条件　――――　125
第２０話　決戦前夜の約束　――――　135
第２１話　王の祝福　――――　144
第２２話　恋愛的共感覚　――――　152
第２３話　望まぬ終わりと不可思議な女神　――――　160
第２４話　彼女は求め、俺は迷う　166
第２５話　存在の証明　――――　173
第２６話　桜の軌跡　――――

スピンオフ
【やりたかっただけスピンオフ】王都魔術捜査官園田海未

王都執行省司令室。

「海未、今回の任務について説明するわ。これが資料よ」

「これは……絵里司令、この薬品はまさか……」

「呪術コカイン。通常のコカインに魔術物質や呪文詠唱を使った既存の麻薬とは違う最新の麻薬。秋葉原で何人か使用者が出ていて被害が大きくなってる。最悪このコカインは並みの検査機じゃないと麻薬と判別不可能、タチの悪さと隠ぺい性なら従来の麻薬以上よ」

「すなわちこれの出所を突き止めて潰すというわけですね」

「そうよ、このまま放っておいたら被害者が増えるばっかりだから早急に止めないと」

「わかりました、この任務、私に任せてください」

「期待してるわ」

秋葉原　南通り

「ここが取引の多い地区ね。見るからに訳アリの魔術師が何人も……」

海未は手にアップルジュースを飲みながら写真の男を待っていた。
（１０時まで後２分、この時間に奴は取引に来るはず。）
ジュースのパックを握り締めると顔を軋ませた。そして……
路地裏に一人の男が現れた、紛れもなく写真の男である。
「ターゲット確認、行動開始」
「あのーすみません」
「何だあんた女が俺に何か用か？」
「求人見たんですけど、楽に６０万稼げるって本当ですか？」
「ああ、何だバイト要望か、それなら本当だ、ならついて来いよ。」
「面接試験とかは？」
「心配ない、誰でも大歓迎だ、最も働くだけでも地獄だがな」
（別に働くのは好きですがやっぱり信用しない方が良いですね）
そして男に連れてこられたのは喫茶店。だがここで海未は恐ろしい物を目にする。
「リーダー、バイト志願者だ。例の新薬試しましょう」
その組織のリーダーと思われる男は煙草を踏み潰しニヤリと笑った。
「小娘さん、ようこそ。少々人が邪魔で申し訳ない」
喫茶店には中高年の若者たちが痩せ細った姿で死んでいた。

「これ、バイトですよね……」
「ああ、そうだよ。バイトだよ、新薬のね」
　そう言いつつ紫の粉を水で溶き、注射器で吸い上げる。
「さあ、おいで、君も彼らと同じモルモットなら言う事聞くよねえ」
　すると男は海未の腕を捕まえ、注射器を突きつける。その時……
「モルモットか、お前たちには他の人間がそう見えてるのだな」
「あん？貴様、どういうつもりだ」
「リアノモート」ギン！
「ぐあああ、貴様、何しやがる!!」
「お前まさか……」
「王都執行省だ、君たちを魔術条例１０７条違反で連行する」
「畜生！だが俺たちだけじゃないぞ、この喫茶店の奴らは」
　ガタッジャキッ
「なるほど、地下が麻薬工場で４０人が働いていた。正に許されるべきではない人間の集まりがここというわけですか、絵里の睨んだ通りですね」
「やっちまえ！」
　一斉に攻撃がかかると海未は背中隠し持っていた武器を取り出した。

「スレイブバレル」
　ズガーン
「おい待てよ。まさかお前、聖神器使いなのか！」
「聖神器ユニコーンアルテミス、ユニコーンに選ばれた者だけが使える第２神器だ」
「そんな……こんな奴に俺たちは……」
「ここは執行省が完全に包囲した。後は連行するだけだ。」
「ちく……しょう……」
　その後麻薬工場となっていた喫茶店の人間は全て逮捕された、だがあのどさくさに紛れてリーダーと幹部数名が逃亡し海未はしばらく捜査を続けていた。
「依然として減りませんね、被害者」
「まあそういわずに座ったら、少し肩の力抜かないと」
　そう言いつつ絵里は缶コーヒーを海未に渡した。
「あいつら一体どこに逃げたのやら」
「執行省が今出所を突きとめようと頑張ってるからせめてその間は休みなさい」
　その言葉を聞いて納得のいく様子の無い海未に絵里はこう付け足した。
「今回の事件、裏にトネリア教団という不気味な教団が関わってる」
「トネリア教団、最近増えてきてる信仰者ですね」

「この事から恐らく聖魔術騎士団が黙ってるはずがない。きっと動いてるはずよ」
海未はそれを聞くと静かに司令室を出て行った。
その後
「聖魔術騎士団か、主に悪教徒や反乱軍の壊滅を生業とする王都直属の魔術騎士。そんな奴らが動き出したなら恐らく全員終わってしまうだろう」
悔しさと笑いが両方出つつ、空を見上げる。すると……
ピローン
携帯から着信が入る、絵里から緊急出動の連絡だ。
場所はトネリア教会で現在麻薬パーティーが行われてるとの事、急いで現場に向かった。
トネリア協会
「今日も大量です。リーダーがトネリア教皇で良かったっすよ」
「この金さえあれば全魔術大国全てと戦争ができるレベルの魔術武装が手に入る、この国で最強の教団が出来る訳だ」
積みあがる大金に野望を口に出すリーダーは静かにワイングラスを傾けた、その時
「おっと邪魔な小娘が入ってきたようだ」
「あなたの好きにはさせませんよ」

「下がってろ、良いぜ、相手になってやる」
　そしてリーダーは長刀を手にした。
「冥剣フォルタ、こいつで貴様を刻む」
　眼に殺意を宿し、先制攻撃を仕掛けたのは海未だった。
「レイリモーナ」
　海未のユニコーンから刃の弾丸が放たれた。
「フォルタエリア！」
「あれは次元魔術、攻撃反射の派生魔術」
「よくも計画台無しにしてくれたなあ、だが近接戦闘に甘さが見える」
「気づかれたか」
「デビルチェーンロック」
「何、拘束魔術だと!!」
「ここで終わりだ……」
「クッこれまでか!!」
「シネエ!!」
　バキーン
「君たち、そこまでだ。」

「あなたは……」
「聖魔術騎士団団長、心咲護と言います。」
「聖魔術騎士団……だと……」
「あなたに逃げ道はありません、重罪魔術師として拘束します」
　すると犯人は剣を落とし手を挙げた。
「リーダーと幹部を連行、執行省の園田海未を救出」
「大丈夫ですか、園田さん」
「まさか私が助けられるとは、皮肉ね、しかもあなたに」
「執行省時代が懐かしいですね」
　この一件以降、呪術コカインによる事件はめっきり消えた。
　これは園田海未の妄想によるストーリーである。
「全部妄想ですか!!」ｂｙ心咲護

シーズン1
第1話　始まりと春風の再会

東京　秋葉原

俺は心咲護、今日から高校2年の純情男子だ、ただ、普通の高校生活を送りたい俺はこの先運命の悪戯が待っている事を知らずに。

「行ってきます」

家を出ると自転車に乗り走っていく、横断歩道を走り抜けると左に曲がる。真っ直ぐ行けばそこは……

「ついた、久しぶりだな。神高」

私立神城寺高等学校。秋葉原で有名な男子校だ。心咲はすぐに自転車を止めるとカバンから写真ケースを見る。

「俺、立派になったよ、全部、君のおかげだ。高坂さん」

そう言うと俺は体育館に入り、式に出席した。

教室に入れば皆ジュースを片手に語り合う中、俺は一人キャラメルの箱を開けた。

ハート形のキャラメルを口に入れると周りから視線を感じる。

何せこのキャラメルは正真正銘のグルコのキャラメルだから。
今時の男子高校生には似合わないというか完全に乙女男子。
気まずくなったので出ようとするが、手が止まる
（こういう時って逃げない方がいいのでは。）
ふと冷静になる。座席にとどまると一方の生徒がある話題を出してきた。
「そういえばここから斜め左の学校が廃校になるって聞いたんだけど。」
「知ってる、音ノ木坂学院だろ。ｕｔｘ学院のせいで生徒が集まらないらしい」
「ああいう古い学校から消えていくんだな。なんか皮肉でしょうがないなぁ」
生徒３人がそう話す中、心咲はとあることに気が付く。
「音ノ木坂学院か、確かあのエリアの方に昔高坂さんと遊んだ公園があったな。今日行ってみるか」
俺の言う高坂さんとは幼馴染の高坂穂乃果の事であり俺は彼女ともう一度会うことを願っていた。
昔はよく彼女に助けられた事もありそれが理由で今の俺ができた。
だから高坂さんにもう一度会ってありがとうを言いたい、それが会いたい理由だ。
そう思いつつあっという間に半日が過ぎて帰宅時間になった。
当然例の場所に向かうからすぐに帰らないけど。

スマホの地図を頼りに公園を目指す、道を通り過ぎていく心咲は無我夢中に自転車を走らせた。だが、この時俺はは気付いていなかった。

大事な写真ケースを落としていることに、その頃写真ケースを拾った少女がそれを見て笑みを浮かべていた、すると少女はつぶやいた。

「戻ってきた、私の大切な友達。会いたかった人」

そう言うと少女も公園へと向かった頃、俺は公園を一人で歩いて回っていた。

桜が並ぶここは有名で奥に広場と大きな桜もある。

俺はこの広場で高坂さんと遊んでいた。久々に来たが風景も変わらない。

安心感があり昔を思い出していた。すると後ろから声がしたそれは……

「ここにいたんだ、心咲護君。」

振り向けば記憶の面影のある少女。そして嬉しそうな顔で言った。

「ずっと待ってたよ。もう一度会える日を」

「高坂穂乃果、本当に会えた。」

「そう、会えたんだよ。心咲君。」

俺と高坂さんの再会。ここから先、俺は大きな事に巻き込まれていくことになる。

第２話　力無き王

かつての思い出の場所、大切な幼馴染の再会、俺は心が舞い上がる中、高坂さんとベンチに座り、話していた。
「心咲君すごく変わったね。昔は一人になると泣き出してたのに」
「いつまでも一人で泣いてる訳ないよ。高坂さんのおかげで前を向けたから今がある」
「学校はどこに通ってるの」
「神城寺高校だよ。ここから斜めの道の高校だ」
すると高坂さんは切なげな顔で俺に呟いた。
「神城寺高校か、凄く人気のある学校だよね。皆絶対そう言うよ」
「高坂さん、どうかしたの」
「私の学校……なくなっちゃうんだ。私の通ってる、音ノ木坂学院」
すると高坂さんは涙をこらえていた、余程音ノ木坂学院が好きなんだろう。
俺は言葉が出かかった。
「まだだ……まだ終わってない……あきらめたら……逃げちゃだめだ……まだ……まだ……希望はある」

その言葉を聞いた高坂さんは俺に泣きながら腕を掴んだ。
「心咲君……音ノ木坂を……助けて……」
俺の一言がまさかこんなことになるとは、高坂さんの涙を見た俺は流石にノーとは言えず少し困り顔をしつつ答えた。
「わかった・・・音ノ木坂と高坂さんの居場所は俺が守る。だから高坂さんも常に何をすべきか俺に教えてくれ」
「ありがとう、心咲君・・・実は思いついた方法があるの」
「それは?」
「スクールアイドル・・・それをやって人気者になって学校の生徒を増やすの」
「ｕｔｘみたいな?」
「そう、一緒にやってくれる」
断る理由もないお願いに返答は当然
「やろう、絶対に成功させよう」
こうして俺はスクールアイドルをやることにした。まずやるべきは……
「どうも皆さん神城寺の心咲護です。高坂さんのお友達と聞いていますが」
「園田海未です、スクールアイドルの助っ人は男子だったとは」
「南ことりです、よろしくね!」

　まさか高坂さんの友達とグループでスクールアイドルやるとは……てっきり高坂さん一人だけだと思った。
「今日からよろしくお願いします、園田さん、南さん」
「ちなみに心咲君は私の幼馴染だよ」
「幼馴染？穂乃果は私たち以外にも幼馴染がいたのですか、しかも男の人、余りにも薄っぺらなその男の言いなりになってるだけでは」
「そんなに怪しまないでよ、ちゃんと知ってる人だから」
「ならいいんですがね、裏切られないよう気を付けるとしましょう」
　そう言うと園田さんは離れていった。
「酷いよ、海未ちゃん心咲君をあんな風に疑って悪い人みたいにするの」
「穂乃果ちゃんの気持ちはわかるよ。あんな言い方初対面の人に失礼だよ」
「ねえ心咲君も一言ぐらい言い返して……あれっ、いない」
「さっき走っていったよ」
「も～こんな肝心な時に～」
　そのころ心咲はというと
「……」
「やっぱり、信じてない……ですか？」

「何ですか、あなたは私に信じてほしいとでも?」
「それはあなたが決めることだ、俺が口を出すことじゃない。ただ覚えていてほしい事が一つある」
そう言うと俺は写真ケースを見せた。
「それは……穂乃果……」
園田さんはその写真で全てを知った。
「正真正銘、俺は高坂さんの幼馴染だ、そして俺は高坂さんに約束したんだ。皆をラブライブへ連れて行くって、だから俺は裏切らない。高坂さんも、あなたもみんなも」
その言葉を聞いた園田さんは少し笑みを浮かべた、すると……
「信じていいかな。ありがとう」
すると園田さんは満足げに帰っていった。俺は新たに肩を入れ直した。
「よし、やるぞ」

第３話　好きの可能性

早朝の道。俺は高坂さんたち３人と登校するため待ち合わせしていた。
今日から自転車通学をやめて徒歩通学に切り替えたのだがこれが取り分け楽しかった。そして走ってくるあの３人が……
「おはよう心咲君、待った？」
「おはようございます。というか出会って早々顔にソースついてるよ」
「あ、ホントだ、穂乃果ちゃん可愛い!!」
南さんがそれに気が付き笑う。
「み、見ないでえええ!!」
「ほら、俺のティッシュ貸すから口拭きなよ」
「ありがとう」
ははっ高坂さんは相変わらずおっちょこちょいだな、俺は高坂さんのそれに助けられたのかもしれないな。
俺は高坂さんの力になると決めたんだ、もっと彼女を見習うべきだな。

「ところで南さん、園田さんはどこに？」
「もうすぐ来ると思うよ」
　すると背後から南さんの言う通りその人は来た。
「おはようございます心咲さん」
「おはようございます、なんか久しぶりですね」
「えっとその……この前のあなたに言った事、すみませんでした」
「気にすることないよ、お互い知らなかった事だし」
「とりあえず早く学校行こうよ」
　南さんの一言で俺たちはひとまず学校へ向かった。
　神城寺高校では
「～♪」
「楽しそうだな今朝何かあった？」
「歳か、まあ、あったと言えばあったかな？」
「もったいぶらねえで教えろよ」
「後でな」
　その一方音ノ木坂は
「部活申請？」

「活動を円滑に進めるためにはこれしかないと思ってるの」
「部活になれば費用が下りますが、流石に難しいんじゃ？」
「当たって砕けろだよ、生徒会室行くよ」
　だが結果は当然
「ダメね、アイドルの真似事なんかを部活にするつもりはないわ」
　そう言うと申請届を突き返した、そんな生徒会長、絢瀬絵里は続けてこう言った。
「そもそも部員が３人しかいない上、成功するかもわからない学校の救済活動に私は肩入れするつもりは無い」
　正論に近い言葉に３人は言い返す事も出来なかった、だがそこに転機が訪れた。
「まあ折角部活申請してくれたんやしここはひとつ条件ださせてくれへん」
　生徒会副会長の東條希笑顔でこう言った。
「ウチは面白いと思うよ、それに人数不足なら増やせばええ、今週中にメンバーを６人に出来たら部活として認める。えりちもそれでええやろ」
「全く、それなら異論はないわ。好きにやりなさい」
「ありがとうございます」
　３人はスキップで生徒会室を出て行った。
「ま、どうせ無理でしょうけど」

学校内

「早くメンバー集めないと、どっかにいい人いないかなあ」

そう言いつつ二人は音楽室へと向かった。

すると向かい合わせに……

「あら?珍しいわねここに来るなんて」

すると赤髪の一人の少女が楽譜を探していた、その一方高坂さんは……

「どこかにいるかな?可愛い入部してくれる人は」

そしてそれはいた、1年の教室に……

「あ、あれだ!!よーしあの二人を誘うよ!!」

少し良からぬ笑みで高坂さんは二人をフォーカスした。

第４話　運命交錯と王の旋律

「お願い、スクールアイドル部に入って！」
「あ、えっとその……いきなり何が……」
よく分からないお願いに困惑する1年生3人、無理もないだろう。
いきなり先輩が頭下げてお願いするのだから、すると赤髪の少女は少しひきつった顔で高坂さんたちに質問した。
「そもそも何で私たちなの、他にも候補あるでしょ？」
「ビビッて来たんだよ。スタイルも良いし可愛いしきっとすごいピッタリだと思ったんだよ。それに一人音楽作れる才能持ってる人がいるなら活動に貢献できるよ。」
「気持ちは嬉しいですけど私にできるかどうか……」
「凛にアイドルは似合わないと思うニャー、残念だけど断るニャー」
「じゃあでも名前だけでも教えて、気が向いたら来れるように」
「来るつもりは無いけど名乗るわ、私は西木野真姫よ」
「小泉花陽です、かよちんって呼んでください」
「星空凛だニャーじゃあメンバー集め頑張るニャー」

「うん、ありがとう」
そういうと1年生は立ち去って行った。その後……
ズーン「なんか……惜しい物を逃した……」
「仕方ないですよ、すぐ見つかると思ったら大間違いです」
「とりあえず他の人探そうよ」
「諦めたくない……」
「えっ……」
「あの3人ならきっと……スクールアイドル部に想いを抱えてるはず。諦めたくない」
「とは言ってもあの人達を勧誘しても同じな気が……」
「それでも私はやる、やるって決めたからには一歩も引きたくない」
「仕方ありませんね、粘ってみますか?」
「私もそうする、穂乃果ちゃんに賛成するよ」
こうしてあの3人を入部させるべく動き出した。
その一方で……
カタカタ「スクールアイドルか、こんなに可愛い衣装着れるなら……悪くないのかな、でも……私にできるの……でも凛ちゃんと一緒にだったら……」
そう言うとラインを送った。

土曜日公園前

「凛ちゃーんこっちこっち」

「真姫ちゃん連れてきたニャー」

「ヴエエ、何故ラーメン屋なんかに私が……」

「だから相談だよ、スクールアイドルについての」

「私は入らないって言ってるでしょ」

「まだ決まった訳じゃないでしょ。考えながらどうするか決めよう」

そうしてラーメン屋へ

「醤油ラーメンニャー」

「塩ラーメンお願いします」

「汁なし担々麺を」

思い思いの注文をすると話を切り出した。

「スクールアイドル、二人はどう思ってるの？」

「凛は面白そうだと思うけどなかなか好きって言えないニャー」

「あれから考えたけど違う音楽ジャンルも知った方がいいのかなって」

「やっぱり皆考えてたんだ」

「かよちんはどうするにゃ？」

「私は……その……」
「好きならやればいいじゃないか？」
「えっ？」
　すると隣の座席にいたのは当然俺だった。
「誘われたんだよね、高坂さんに」
「知ってるの、でも君どう見ても他校生だよね？」
「高坂さんたちは友達だよ、俺もスクールアイドルの一員だ。それに……」
　そういうと俺はスープを飲み込んだ。
「好きなのにやらないのはもったいないと思う、せっかく見つけたやりたい事なら失敗を考えずに楽しもうって言うのが最高だと思う。乗らないか？俺たちの考えに」
「それなら」
　３人「やろう!!」
　そして翌日
「ホントに入ってくれるの、やったー!!」
　３人「お世話になりまーす」
「何とか部員の目標達成しましたね」
「そもそもどうして入ったの？」

「穂乃果先輩の友達の男性に」
「それって……」
「一本取られましたね。彼に」
海未は少し嬉しそうだった。

第5話　願いの華

生徒会室

「まさか本当に集めて来るとは・・・甘く見すぎたわ」

「6人集まったんだから早く承認お願い！」

「ううッ、何か悔しい」

「もう逃げられへんよ。認めたらどうや？」

「わかったわ……部としての援助はするけど一つまた課題がある」

「まだ何かあるのですか？」

「この音ノ木坂の類似部活にアイドル研究部があるの、そこから部室を丸ごと使うことが出来れば部活としてやりやすいかｍ」

「よーしそうと決まればアイドル研究部とやらに交渉に」

「待ってください、穂乃果、そんな何も考えずに……」

「元気やなあ、迷いも無くて」

その頃

「だーかーらー何であんた達に部室貸さなきゃいけないのよ！」

「スクールアイドル部には必要なの、どうか合同で使わせてよ!!」
「とりあえず話し合いを、一旦落ち着いてください」
「それよりスクールアイドル部とか言ったわね、何を目指してるの？」
「ラブライブ出場、音ノ木坂の廃校阻止」
「音ノ木坂の廃校阻止か、くだらない戯言でアイドル気取ってる訳？」
「くだらない戯言なんかじゃない！私たちは本気で……」
「所詮は戯言！アイドルを甘く見てるんじゃないわよ！この役立たずの集まり!!」
　そして今
「そっか、彼女がそんなことを……」
「心咲君、私どうすれば……いいの？」
「その人、名前は……」
「矢澤にこっていう３年生なんだけど」
「俺より年上か、流石に難題だなあ」
　カラン
「あっいたいた、ラーメン屋にいたあの人だ」
「やあ、あの時はどうも、話は聞いてるよ小泉さん、、星空さん、西木野さん」
「心咲先輩、以前は助言ありがとうございました」

「凛もスクールアイドルに入ったニャー」
「不本意だけどあなたに頼ってよかった、感謝するわ」
「役に立ててよかった、入ってくれた君たちにも感謝してる」
「あれがスクールアイドル部の主幹のようね」
「えっ？」
　その言葉を聞いた俺たちはファミレスの隣の座席を振り向いた。
「ば、ばれた……」
「にこ先輩！何でこんなところに!!」
「し、知らないわよ！偶然あなたたちが……」
　苦し紛れに逃げようとする彼女を見た俺は……
「詳しく聞かせてくれないかな？」
「話す事なんて何も……」
「本当にそうかな？何もないならどうしてメモなんてつけてるの？」
「そ、それは」
「興味、あるんだろ」
「私は、寂しかった。部室で一人で、ずっと仲間を待ってた……でも私は、本気でアイドルを好きだって思ってる人が欲しかった、スクールアイドル部の皆に聞きたい、本当に

アイドルが好きなの？」
「勿論、すごーい大好きだよ」
「じゃあ、私と一緒に、アイドル研究部になってくれる」
「スクールアイドル部兼アイドル研究部ってどうかな？」
「それでも、いいよ。ありがとう」
「君も仲間だ！そして矢澤先輩と皆に約束する、俺が、ラブライブに導くって」

第6話　舞姫鏡月

とある休日前の話

「えっ？コスプレショップ……ですか……高坂さんたちと四人で？」

電話の向こうで南さんと話す、南さんが衣装作りのアイデアを得るためにわざわざ俺を誘うのか？

すると南さんはこう返した。

「心咲君の意見を聞くついでに心咲君に着せたい服があるから」

ということはつまり、俺は着せ替え人形にされるということだ。

でもこれも仕事だと思って快く引き受けた。そして日曜日……

「心咲君！どうかな？これ！」

高坂さんのコスプレを見るや否やどう答えていいのか。

なぜならへそ出しシャツにギリギリのスカート、ヘッドホンとハートのスニーカー、どう見ても誘ってるようにしか見えないのだ。

目をそらしつつ評価は当然の事……

「あまり直視できない奴はちょっと……」

すると南さんが小声で耳元で囁く。
「心咲君って、こういうの耐性無い？純情系かな？」
バレた、当然男子校育ちな上に性の潔癖を汚さない生活スタイルをやっていたせいでここで弱点が露呈してしまった。
すると物凄いオーラを発して園田さんが……
「その破廉恥な服、戻してもらいましょうか？」
巫女服の園田さんが模造刀を突きつけひきつった笑いで高坂さんに言った。
当然服はちゃんと戻したあたり園田さんに逆らうことはできないと感じた。
すると南さんは……
「じゃあここで心咲君のターンだよ、この服着てね。」
だがそれは明らかにアレな物だった。そして
「あの……これは……」セーラー服を着せられ……
「ちょっとこれは恥ずかしいよう……」チャイナドレスに……
「いらっしゃいませ……ご主人……様……」メイド服まで……
女装をさせられた、そしてある程度衣装の構想は出来、俺も役に立てた。
すると南さんが
「そうだ！プリクラ取ろうよ。」

衣装服の横にプリクラの台があり４人そろって撮影した。
人数分プリントするとその後はお開きになった。
その翌日
「遅刻する～!!」
高坂さんの走る姿が、でも何とか間に合った。ＨＲが終わると高坂さんは気付く、そう、プリクラが無くなっていた。
慌てるその一方……
生徒会室前では
「うん？プリクラが落ちとる。誰が映っとるんかな、お？」
東條先輩は気付く。
「穂乃果、それとこの男の子は……」
夕方
「忘れ物ボックスに入ってたよ。良かったね。見つかって」
「届主は・・・希先輩だ」
「後でお礼言わないとね」
そして
とある広場でアイスコーヒーを開けながら俺はプリクラを眺めていた。その時……

「君、ちょっといいかな」
「音ノ木坂？」
「君がスクールアイドル部の主幹やね。心咲護君」
「どこでそれを？」
「にこっちから聞いたんや。穂乃果の幼馴染やね」
「はい、俺がスクールアイドル部の活動に協力してます。あなたは？」
「ウチは東條希。３年生の生徒会副会長や」
「東條先輩ですね。よろしくお願いします」
「色々話、聞かせてくれへん」
「いいですよ」

翌日

「というわけでウチはスクールアイドル部の方に回ることにした」
「は？・・・希、本気で言ってるの？」
「勿論や。あのメンバーに可能性を見出したからウチは入るんや」
「生徒会と掛け持ちする気？」
「それだけの価値はあるで。じゃあ部室に挨拶に行ってくるで」

「希……何を考えてるの……？」

部室

「ほ、ホントに入ってくれるの？」

「どうゆう風の吹き回しですか？」

「まあ楽しそうだったのと協力したくなったとか、まあ別の理由があるんやけど」

「スクールアイドル部に何か気になるものでも？」

「だって心咲君が面白そうやから。見てみたいんや!!」

第７話　哀無き空

（音ノ木坂の廃校、私たちの居場所が無くなる、絶望的な未来。私は変えたい。音ノ木坂の未来を……）
（君はそれを願うなら……俺たちの仲間だ。）
（仲間……誰……）
（君が信じれば……未来は変わる……）
（想いに目覚めて……俺が……必ず……）
　ピピピピ
「夢か……」
　眠い目をこすり鏡の前に立つ髪を結ぶと……
「あの男の子は……誰？」
　そうつぶやくと服を着替え、一階へと降りて行った、登校中にコーヒーショップに立ち寄ると新作のフレーバードリンクを頼むと席へついた。
　スマホを手にドリンクを飲んでいると後ろから……
「隣、いいですか？」

絢瀬先輩の隣には夢の中の人が……思わず目をそらすと俺はノートを手にした。
その後絢瀬先輩は席を立ち逃げるように音ノ木坂へ向かって行った。
生徒会室
「えりち、この仕事今日中に頼むな」
「随分な命令ね、スクールアイドル部に魂売った裏切り者が」
「でもウチは元からどのサイドにも面白さがあると思うｎ」
バンッ!!
「今の事の重大さ、わかってるの!!面白いとかでどっちつかずな発想やめてほしいんだけど、学校守るのに必死なのわからないのならいっそここから出てって!!」
「えりち、わかったから少し落ち着き、ウチは少し外に出る」
そういうと東條先輩は生徒会室を後にした。自分の言ったことを後悔しつつ書類に手を出した。その頃東條先輩は……
「あかん、地雷踏んだ……あんなに怒るとは」
「絵里ちゃんも音ノ木坂を存続させるために頑張ってるから……」
「それなら絵里ちゃんをスクールアイドル部に入れる事もできるんじゃない?」
「穂乃果はバカですか!あの人生徒会長ですよ!!」
「でも可愛いしバレエ経験もあるし何より衣装のアイデアにもなりそう。」

「ことりまで・・・そんな簡単にこっちに協力してくれるはずが……」
「そうと決まれば生徒会室にゴー！」
「今のえりちは危ないと思うなあ」
「……」パラッパラッ
「スクールアイドルか、思ってたより楽しそう。もしこれが廃校の抑止力になるなら。」
「絵里ちゃ～んどこー。」ガタッゴソッ
（あ、危うく見つかるとこだった。）
「ウチの教室に何か用？」
「絵里ちゃん、スクールアイドルにならない？」
「急にどうして、何か希に吹き込まれた？私は入らないって言ってるでしょ？」
「絵里ちゃんを信じることにした。いいスクールアイドルになれると思って。」
「ごめんけどあなたたちについてくつもりは無い。他を当たって」
「穂乃果、もうあきらめましょう」
（こんな、こんなはずじゃあないのに・・・なんで・・・）
　絢瀬先輩の瞳は虚ろになり帰り支度をした。
　その帰りに誰もいない広場に寄った。太陽が沈みかける空を見ながら考える。
「結局、素直になれないよ、私……どうしたらいいの……」

涙を流しながら自分を悔やむ。その時だった。
「わかりますか?自分についた偽りがどれだけ苦しいのか」
絢瀬先輩は涙を拭き声のする方へと向いた。
「あなた、あの時の……」
「東條先輩から聞きました。悩んでますね」
「誰……なの」
「心咲護、スクールアイドル部の主幹です」
「あなたもスクールアイドル部に」
「高坂さんの願いですから。それと今で分かりましたか」
「苦しい……なんで苦しいの……」
「偽りの感情ばかりを表に出していれば人間はそうなります、そして自分の偽りは人の感情をも壊します。人を騙し続ければそれなりの裁き・痛み・苦痛を感じるものです。最終的には残酷な破滅、ホントの事を知らないまま自分を滅ぼすことになります」
「私が、傷つけてるの!大切な友達も学校も全部。どうすればいいの!!」
「自分の立場に縛られない、偽りを無くせばいい。そして自分の信じた物を好きなことを好きだと言えるその勇気を持ってください。もう、自分を偽るのはやめましょう」
「それで……変わるの……」

「はい、もう始まってるんですから、新しい自分が、家まで送りますよ。絢瀬先輩」
その後のスクールアイドル部
ガラッ
「ん？」
「みんな……迷惑じゃないよね……」
「全然！絵里ちゃんが部室訪ねてきたの初めてだよ」
「みんなにこれを」
「入部届だ！これで９人そろったね!!」
「ようこそ、スクールアイドル部に」
「うん、よろしく」
その頃心咲は
「あの時からか……こんな感情は……偽り一つで人の全てが狂う。俺のように……
見つけてやるさ……真実を……」

第８話　弱気な彼女も恋をする

ａｍ８：００　公園前

「じゃあ今日はマラソン１０周と腹筋６０回。基礎体力運動を重点的にやっていく」

「了解！」

夏の近い６月、メンバーが９人そろい、早速練習に取り掛かっていた。

俺はトレーニングのコーチとして指導に当たり、メンバーと公園付近で先頭を走りだした。

ただ一人、例外もいるが……

「はあ、はあ、みんなぁ……待ってよぉ……」

後方から大分遅れて走ってる彼女、小泉さんは運動が少しきついみたいだった。

まあいきなり１０周は無理があったかな？完全に距離が離された小泉さんを放っておくわけにはいかず俺はストップをかけた。

「園田さん、ちょっといいですか」

「構いませんが……」

「俺は少し小泉さんのサポートに回ります、園田さんに先頭を任せていいですか？」

「そういう事でしたら後は任せてください」
「ありがとうございます、それと5週走ったら少し休憩をはさむように」
「わかりました」
　そう言うと俺は小泉さんの元についた。
「ごめんなさい、体力無くて……」
「誰にだって不得意な分野はあるよ。小泉さんは少し別のメニューをやろう」
　そういうと俺は公園のジャングルジムを使うことにした。まずは簡単な物からクリアする事だ、そう思いつつ小泉さんとジャングルジムに向かった。
「とりあえずこれを登ってみよう、登れたらそれを6セットだ」
「わかりました。これならできそうです」
　ただかなり大きいジャングルジムだから足を鍛えるのにうってつけだ、そして小泉さんはジャングルジムを登りきるとそれを繰り返した。
「大分いいよ、後2セットだ、頑張れ!!」
　ここまでは順調だった……だが
「あと少し……あと少し……」
　その時
　ズリイ!!

「あっ!!」
足を滑らせた小泉さんが転落
「小泉さん!!」
慌てた俺は手を出した。すると……

落下してきた小泉さんを受け止めたのだ、お姫様抱っこで。
「だ、大丈夫!!」
「何とか……ありが……とう」
「良かった……助けられて」
その後練習が終わりお開きになった。ただ小泉さんは様子が少し変わっていた。
そして翌日学校では

「なんか最近かよちんの様子が変だニャ〜、皆何か知ってるかにゃ?」
「確かに、スマホばかり見て何故か顔が赤い……」
「上の空の事も多いわね。それに少し嬉しそうな感じだった」
「それってつまり……」
「好きな人がいる!!」

全会一致で結論を出した。ただその中で希だけ何か察したのかすると……

「希、どこに行くの？」

「少し買い出しに……」

そう言いつつ校庭に向かった。その前にはスマホを見て顔を赤くする小泉さんがいた。

「好きな人……心咲君やろ」

「希ちゃん……どうして知ってるの？」

「何となく見えてた、お姫様抱っこが……」

「は、はわわわわわわわ!!」

まるで壊れた人形のように沸騰する小泉さんを見ると、東條先輩はニコニコしていた。

だが東條先輩はこう切り出した、少し切なげな顔で。

「花陽ちゃん、実は伝えたいことがあるんやけど」

「その様子だと……いい話じゃないんですね」

少しつらそうな目で見る小泉さんに東條先輩は真実を告げた。

「心咲君には、もう好きな人がいるんよ。穂乃果ちゃんていう大事な人が」

すると小泉さんは儚げな顔でスマホを見た。

「そっか……でも、仕方ないよね……決めた人がいるなら……」
スマホに写っていた心咲の写真に涙が落ちた。
「短かったな……こんなにドキドキしたの、誰かを好きだと思ったの」
東條先輩はするとこんな提案をした。
「それなら、心咲君の想いは届かなくても心咲君に精一杯何かしよう」
「はい、できる事なら」
小泉さんの初恋は叶わず、そして小泉さんは新しい物を見つけた。心咲君の為に力になろうと。

第９話　全ては君への想いの為に

１２時　神城寺高校屋上

「音ノ木坂の廃校阻止にスクールアイドル、そのコーチとはお前も大層な事に巻き込まれたな。俺が言うのもなんだけど護はちゃんとやりきれるのか？」

俺は屋上で友人の歳とコーヒーを片手に話していた、歳の言葉に対して答えた。

「助けたい人がいるんだ。自分にとっての大切な、そのために引き受けた事だから。勿論俺は逃げるつもりは無い」

そのセリフに歳は少し不安そうな顔で呟いた。

「お前がどうするかに口出しするつもりは無いけど、昔みたいに自分を壊すような事はするなよ。ただでさえお前は脆いんだからな」

その言葉を聞くと俺はコーヒーを飲み干した。

「わかってる、弱音吐いてるようじゃ自分も弱いままだから」

その後カバンを背負うと缶を捨てて帰路についた、その後、俺は明日のトレーニングプランを考え、就寝した。

翌朝　公園

「じゃあ、今回からダンスに入ってく、尚今回指揮をとるのは絢瀬先輩。皆にパフォーマンスの説明資料渡すからそれに従って行動するように、一通り覚えたらそれを3セット繰り返す事。実際のライブを想定して音楽を流すからそれに合わせてくれ」

「わかりました」

そして俺はラジカセを起動して確認ボードとペンを手にした。

カリキュラムに沿ってパフォーマンスを行うメンバーに対してボードに評価をつけていく。

絢瀬先輩と一緒に組んだダンスの構成は西木野さんの曲にピッタリだと思いつつペンを回す。

その後これを繰り返した後に休憩に入った。

「お疲れ様、各自水分補給と塩分補給は忘れずに」

そういうと俺はスポーツドリンクのボトルを開けた。すると隣に座ってきたのは、

「心咲君、隣良いかな?」

小泉さんが少し大きめのおにぎりを持って嬉しそうにこっちに来た。

「塩分補給と言ったらおにぎりですよね。中身はシャケですが心咲君どうですか」

「ありがたいよ、小泉さんが良いならいただきます」

すると小泉さんは心なしか顔が赤くなってた、

少し気になりつつ俺はおにぎりを口にした。その様子を見ていた高坂さんは……
（嫌だ、その笑顔は、私の物だから、心咲君は、私の……）
「穂乃果、具合悪そうですけど大丈夫ですか？」
「あ、い、いやなんでもないから」
そうはぐらかすと高坂さんは俺の所へ駆け寄った。
「心咲君、この後時間ある？」
「大丈夫ですよ。遊びに行きましょうか？」
「私の実家に来てほしいんだけどいいかな。二人で話がしたいし……」
「高坂さんの実家、穂むらですね。わかりました」
そして俺は穂むらに挨拶がてら立ち寄ることにした。
ガラッ「ただいまー」
「失礼します」
「おかえり、お、そこのイケメン君、もしかして!!」
「お久しぶりです、心咲護と言います」
「あらー話は聞いてるよ。最近穂乃果と付き合い始めたのよね。変わらないけど大きくなったね」
その言葉を聞くとお互い顔が真っ赤になった。俺は少しカタコトの口調で

「つ、付き合ってるわけじゃなくて、ただの友達というかなんというか」
「ウフフちょっと待ってて」
そう言うと家に何かしに行った。すると
「お姉ちゃんお帰り、それと心咲兄さんですね。妹の雪穂と言います」
「心咲護です。初対面ですね」
「それにしてもカッコイイね～お姉ちゃんのフィアンセは」
ゴフゥ！
「フィアンセって何も俺は友達同士の関係でそんなんじゃないよ」
「お待たせ～準備できたよ。それにそろそろ来ると思うから」
「来るって誰が？」
何も状況を分からない俺はただ思考を整えるだけで精一杯だった。
ガラッ!!
「お世話になってます、高坂さん」
少し茶髪の大人びた女性、それを見た俺は……
「母さん！何でここに!!」
そう紛れもなく俺の母さんだった。
「心咲姉さん、久しぶり。さあ茶の間に上がってください」

そうして高坂家に上がることになった、俺はただお茶を飲みながら思考を無にしていた。
「それで、穂乃果ちゃんは護とどこまで行ってるのかな？」
「……」
ショートしてる、完全に壊れたなと思いつつ俺はポケットからキャラメルを取り出した。
すると高坂さんは立ち上がり俺について来てと言わんばかりの視線に俺は高坂さんと外に出た。
「ごめんね、うちのお母さんが。」
「いや、こっちも悪かった、まさかあんな遠慮のないこと言ってくるなんて……」
「ねえ、心咲君私をどう見てるのかな？」
「どう見てるって、」
「友達以外で、一人の……女の子として見てるの？」
「えっ」
余りにも唐突すぎる質問に俺は驚いた、そして出た言葉は……
「俺は……」

第１０話　友達を助けるのに選択肢は必要なのか

夏休みまで後2週間を切った、その頃音ノ木坂は夏の学校説明会の準備に追われていた。

何人来るのかは分からないがスクールアイドル部もまた説明会で行うパフォーマンスの最終確認や衣装作りを急ピッチで進めていた。

そんな中矢澤先輩がメンバーに話を切り出した。

「心咲君は今頃私たちのプロモーションビデオの編集中だね。でもあれでよかったのかな、私たちのチーム名」

少し不満そうに矢澤先輩はキツネのマーチを開ける。それに対し凛は……

「にこちゃんの考案のニコニーズは凛もあんまりだと思うニャー」

すると東條先輩はさりげなくキツネのマーチを摘み矢澤先輩に対して正論をぶつけた。

「そもそもこの部活の主幹は心咲君やし心咲君に任せるのが英断やと思う。それなりに本人も考えてるんよ」

実は3日前

「スクールアイドル部のユニット名か、そういえば考えてなかったな」
練習を終えてファミレスでぐだってた時に南さんが聞いてきた。
「何かいい案があればいいけど、アライズみたいにカッコイイのとか可愛いのとか」
その話を聞いた矢澤先輩が飛びついた。
「可愛いユニット名ならニコニーズが一番よ。これなら……」
「ごめん、凛はそれ却下だにゃ」
「はあ！信じらんない！なんでいつも私の案却下なのよ。ニコニーズのどこが悪い訳」
それに対し園田さんは少し呆れた顔で正論をぶつけた。
「にこ、あなたはいつも自分中心に考えすぎです。自意識過剰な発想はやめて普通に考えてください」
これで論破された矢澤先輩は体育座りで撃沈していた。そして俺は考えた末……
「ミューズはどうかな。女神ということで」
するとメンバーは全会一致で賛成、こうしてメンバーのアイドルユニットが完成した。
そして俺は今
「歳、夜食買ってきたぞ。後どのくらいで完成するんだ」
「注文通りの映像は出来た、後は高画質化と高音質化で一晩ってとこだな」

「とりあえずこのまま頑張ってくれ。後でメイド喫茶でおごるから」
「よっしゃ、任せろ」
そうして二人は徹夜した。
そして翌朝
「ＰＶ完成したぞ。後は投稿するだけだ」
「わざわざごめんね、こんな大変な作業引き受けてくれて。おかげで私はぐっすり眠れたわ」
「西木野さんには説明会の準備に集中してほしいので、流石に無理はさせたくなかったんです」
「でも心咲君の友達がこんなに編集頑張ってくれたことには感謝してる」
「そう言ってもらえると友達もありがたいです。アップロードの方も任せてください」
そう言いつつ電話を切るとメイド喫茶に足を運んだ。
「いやーバンド部で外出るの久しぶりだな。今回は後輩と一緒か、智樹も楽しめよ」
「メイド喫茶ですか。相変わらず歳先輩はこういうの好きですね」
一緒に歩いているのは俺の後輩の西条智樹、バンド部のドラマーでロボットオタクの1年生だ
すると歳はアキバマップに指をさしながら俺に近づいた。

「ちょっとこれ見てみろよ、これから行く店の名物なんだけど。」
「これは……伝説のメイドミナリンスキー」
　俺は名前こそ知っていたが全くの無知だった。ここで歳はとある異な事を口にした。
「実は、昨日編集を頼まれた映像の中に南ことりていうそのミナリンスキーにそっくりな女の子がいてさ、お前が知ってて一緒にいるのか分からなかったんだよ。全然それについては知らないっぽかったし、もしかしてミナリンスキーが心咲の事知ってる可能性があるか知りたいんだよ」
　この話を聞くと俺は少し不信に思いつつマップを閉じてジト目で返した。
「単純に似てただけじゃないのか。南さんがミナリンスキー?本人からそんな事聞いてないぞ」
　それに合わせるかのように智樹が呆れた顔で……
「護先輩、女の子には人には言えない秘密もあるんですよ」
　自慢気の智樹にツッコミや反論したいがそろそろ店が近づいてきたため一旦話を切った。
「いらっしゃいませーご主人様」
　お決まりの言葉あれ……この声どっかで……
「え、あ……心咲君……」

「その声、南さん……ですか？」
間違いなく写真で見たミナリンスキーだったが歳の言ってた事は見事に的中していた。
その後
「まさかミナリンスキーが南さんだったのか。なんか驚いたよ」
コーヒーを飲みながら話を振ると南さんは少し照れながら……
「心咲君がここに来る事は無いかなと思ってたらホントに来ると思わなかったよ。今日は友達も一緒なんだね」
「西条智樹です。初めまして」
「桐島歳だ。昨日ミューズのビデオを編集したのは俺なんだぜ」
自慢気に言った歳に対して南さんの対応は優しかった。
「歳君って言うんだね、編集お疲れ様。頑張ったね」
すると歳は緩い顔で幸せモードに入っていた。
俺は歳を後回しにしてある質問をした。
「そもそもなんでメイド喫茶でアルバイトを？何か理由があるんじゃないか？」
それについて聞いた瞬間数秒の間を置いて答えた。
「単純な趣味です。ただ好きでやってるだけだから」

その頃

「えっ、ことりが留学!!」

スクールアイドル部の面々は突然の海未の話に混乱していた。

「出発は明日の夜、学校説明会のライブをもってチーム脱退と言うことになります」

ショックを隠せないメンバーは言葉を失うが真っ先に問い詰めたのは高坂さんだった。

「なにそれ、ことりちゃんがいなくなるってこと!!もう友達じゃないってこと!!もう会えないってこと!!一緒にラブライブに出れないってこと!!答えて、答えてよ!海未ちゃん!!」

高坂さんが悲痛な思いで園田さんの肩を掴む。園田さんは少し涙をこらえながら高坂さんに告げた。

「引き止めれるなら……引き止めたいですよ。大切な友達だから」

その日から彼女たちは最後を覚悟した。今まで通りにやってきた事が、簡単に無意味になると。

翌日　学校説明会当日

音ノ木坂前で俺は視察に出ていた、当然中までには入らないが確認はしておかなければ。

すると一人の関係者が俺に声をかけた。
「そこの神城寺の人、この学園の理事長の者だけどここに何か用？」
理事長に声を掛けられ少し動揺するも何とか話をする。
「この学校のスクールアイドル部を手伝ってる、部活関係者です。心咲護と言います」
名前を聞いた理事長さんは笑顔で
「君があの私の娘が言ってた心咲君ね。お世話になってるわ」
「娘さんもこの学校の生徒ですか。」
「あら、聞いてない？あなたの部にいる南ことりは私の娘よ」
「そうでしたか」
「今日は最後の舞台になりそうね」
「どういうことですか」
突然の話に顔色が変わる。すると
「今日でことりは留学するの。このライブが終わった夜」
「えっ」
突然の報告に俺は頭の中が真っ白になった。
その頃講堂ではライブが始まった、ビデオでやったパフォーマンスはそのままにアレンジを加えた衣装。

歌う姿はまさしくこのためのステージだ、今回の為に俺が監修したダンスの振り付けも完璧だ。
ライブが終わり客席からは多くの声援が送られた。
やり遂げた事に涙を流しつつ声援に答えた。

後片付けが終わり南さんが空港に向かった、誰にも礼を言わず無言でタクシーに空港の改札口前に行こうとした瞬間待っていたのは……
「悪いけど、ここから先は行かせるわけにはいかない」
鋭い目つきで南さんを睨む。南さんに俺は辛くても突きつける言葉があった。
「留学の件、あなたは嬉しくなさそうですね」
南さんは少し戸惑いながら笑顔を向ける
「でも、私はお母さんに言われたから、それで……」
「その理由、納得できてない感じですね、それにあなたはミューズのメンバーに何も言わずにここまできた。それで残された友達がどれだけ傷つくか分かりますか？」
南さんは涙を流しながら自分のやろうとしたことに気づく。
「あなたの間違いは二つ、仲間への想いを捨てきれなかった事と、自分自身に嘘をついた事だ。自分の嘘、建前の感情が引き起こすのは残酷な悲劇、嘘一つで誰かの人生を壊す

事もできる、全部狂ってからじゃ遅いんですよ。高坂さんだってあなたと別れるのを拒んで泣いてたんですよ。そんな高坂さんを、みんなの気持ちを裏切ろうとしてる、それが許されますか？」

南さんは枯れそうな声で伝えた。

「裏切りたくない……壊したくない……望むなら、みんなと一緒にいたい!!」

その言葉を聞いた俺は手を伸ばした。

「あなたの居場所はここです。戻ってきてください。俺とみんなの、ミューズの元へ!!」

南さんは俺に抱き着いた。

「ありがとう……ありがとう……」

すると近くでその様子を見ていた理事長さんは

「どうやら私の負けね、このチケットの必要性はなくなったわ」

すると理事長さんはチケットを二つに破った。

「いい仲間を持ったわね、ことり。彼らと好きな道を行きなさい」

満足気に理事長はエントランスを出て行った。

それから翌日

「というわけで南さんの復活にカンパーイ」

あの一件後。俺はスクールアイドル部の部室に出入りできるようになり、パーティに

興じていた。
ドリンクやお菓子などを囲みつつ俺はカフェオレを片手にじっとしてるだけだったが。すると
「心咲君、ちょっといいかな？」
少し悪戯な笑みで真正面を向くそして……
「お礼」
その瞬間南さんが俺の口にキスをした、思考回路が停止する。
「無防備だね、心咲君」
自分のファーストキスが南さんに奪われるなんて。
顔を赤くしまるでロボットのようになってしまった俺はもはやショートしてしまった。
園田さんはその光景を見て気絶した。
この二人は近くのソファーで休む事になった。そんな中高坂さんだけ様子が違い……
パーティが終わり、帰った後に帰り道にモヤモヤする俺と高坂さん。
話す事も出来ずただ何も無く帰路についた、高坂さんはぬいぐるみを抱きしめ思った言葉を口にした。

「嫌だ、心咲君は、私の物、胸が……痛い……」

一方俺は

「なんでだろう、こんなにスッキリしないの、俺の好きな人は、高坂さんだから、本来なら、恋人同士でやるキスをなぜ南さんが、明日会いづらくなった。高坂さんに」

両想いなはずなのにすれ違う、じれったい恋心。それは叶うのはいつか・・・

「ははっ完全にダメ男だ。俺」

第１１話　合宿危うくも避けられぬ心

学校説明会も終わり高校生活２度目の夏休みに入った。
ミューズのビデオはランキングで４位を獲得し、学校説明会の評判も大きく出て最近はネット掲示板のコメントを見ながらニヤリとしていた。
だがまだこれで良しとはいかない、次のステップに向けて新しい特訓が始まろうとしていた。
それは夏休みの数日前・・・
「西木野さんの別荘で強化合宿？」
「海未からの提案でよりチームワークを強化するためにやりたいって」
「成程、それは良いかもしれませんね。少しプランを考えてみます」
「ありがとう、でも今回は出来れば体を鍛えるより連携行動重視でお願い」
「わかりました」
そして現在
広場の自販機前で高坂さんはオレンジ飲料を飲みながら不安な顔をしていた。
穂むらでのあの言葉を思い出して・・・

『俺は……ただ分からないだけなんだ、俺にとって高坂さんは何なのか、どうなりたいのか、でももし・・・高坂さんが俺にとっての運命の人なら……

それも悪くないと思う。でもまだ決まった事じゃないから、今はその言葉には答えられない。本当にごめん』

「私は本当に心咲君の運命の人なのかな?」

涙ぐんだ目でスマホを手に取ると心咲の写真を見ながら想い浸っていた。

そんな高坂さんを呼ぶ声がした。

「穂乃果ちゃんここにいたんだ」

南さんだった、高坂さんは逃げるように笑顔で離れる。すると……

「逃げないでよ、あの時私は穂乃果ちゃんの気持ちをわかってなかった。そのせいで穂乃果ちゃんに辛い思いをさせて本当に……ごめんなさい」

その言葉を聞いた高坂さんは涙を流しながらで振り向いた。

「いつ、気づいたの、私の好きな人」

「あの後希ちゃんに言われてね、本当に酷い事しちゃった。絶対傷ついてると思ったから素直に謝りたかった、本当にごめん。穂乃果ちゃんから心咲君を奪う様な事して」

「じゃあことりちゃんは心咲君の事、諦めるの?」

「穂乃果ちゃんの大事な人を奪えないから、でも穂乃果ちゃんが心咲君と幸せになって

くれるなら、私はそれでいい。絶対に幸せになって、応援してるよ」
その言葉に高坂さんは笑顔が戻った、そして高坂さんは元気を取り戻して
「絶対に幸せになる、ありがとうことりちゃん」
いつもの元気を取り戻しお互い前に進むことにした。
そのころ俺は合宿のプランをこれでもかと言うほど考えた。
結果としてバレーが候補に入った事、夕食は合同で作る事がルールになった。
だがこの合宿に対しての俺は……
「男が一人じゃ身が持たないな」
余り考えなかったがこの合宿はっきり言ってハーレムじゃないかと、これまでの活動は全て俺一人の力、他の男の協力は一切ない。
すなわち今回の合宿は女子９人＋男１人。
「どう考えても俺の苦手なパターンだ、これは……」
まさか女子９人と寝泊まりする事になるとは思ってなかった。
純情丸出しの潔癖男子にはまさに試練、どうするんだ、俺。
そんな考えをしてるうちに１日過ぎてしまった。
「えっ心咲君ついていかないの!!」
合宿のプランが完成し、資料を渡した後の俺の言葉を聞いてこの反応である。

「なんかごめん、でも俺がついてくのはまずい気がして」
「何か理由があるんですか」
「女子の寝泊まりに男が入るつもりは無いよ」
　西木野さんは納得していないが園田さんはわかっていたようだった。
「それもそうですね、私もそれは危ないと思います」
「なのでミューズのメンバーで楽しんでください」
「ちょっと待って、それなら別室を用意するからどうにか参加してくれない？」
「別室ですか？」
「私の別荘には2つだけ寝室があるの。それを使って欲しい、それでどうかしら？」
　その言葉を聞いた俺は少しほっとした。
「それなら多分大丈夫ですね、西木野さんありがとうございます」
　出発は明後日、準備開始だ。
「着替えとシャンプーに財布にスポーツドリンク、必要最低限の物に抜かりはないな」
「護、どうせならこれ使いなさい」
「香水？なんでこれを」
「お父さんが使ってる物はみんな護に最適だと思うわよ。汗かいてもいいように」
「じゃあ持ってくよ。」

「ちなみに合宿のお楽しみもあるなら香水は絶対よ」
「お楽しみって何なんだ」
「それは……」
『はっ……そんな……強く揉んじゃ……そんな……ところいけなっあん！』
「みたいなことを夜に……」
「そんな破廉恥な事断固として俺はしないから!!」
　その一方では……
「うさぎパジャマ、なんか違う、キツネ系かな？それともいちごとか……」
「お姉ちゃんなんか悶々とした感じでパジャマ考えてるね、合宿に心咲お兄さんが来るから可愛いって言ってもらえる奴を探してあんなパジャマを……」
「恋する乙女は服で手を抜かないって聞くけど、あんなに鏡の前でニヤニヤしながら着替えてるの本当に護君が好きなのね」
「ちょっと覗かないでよ!!大事な案件なんだから」
　高坂さんがちょっと可愛いと思った瞬間だった。
　別に変な意味等では無い、断じて。
　そして迎えた当日
「まさかこの山奥に西木野さんの別荘が」

「山を登るのもトレーニングの一環です」
園田さんはそう言いつつスポーツドリンクを汗を拭いつつ喉に流し込んだ。
「小泉さん、あと少し頑張れますか？」
「はい、ゆっくりであれば」
「３年生組は今頃プラン通りの準備を進めてるはずだ、ここを乗り越えれば自由だよ」
「かよちん、辛くなったら凛に頼るニャー」
「ことりも手を貸すよ」
励まし合い山の斜面を登る。そして２０分でようやく……
「おっ来たみたいやな」
「疲れたニコー」
「お疲れ様です、朝から大変でしたね。どうでしたかカレーの材料は？」
「発注されたものは全部運んだわ。後は夜を待つだけ」
「全員そろったみたいね、ようこそ、私の別荘へ」
「一泊よろしくお願いします」
そして1時間の休みの後、目的であるバレーを始めた。
「じゃあメンバーをくじ引きをで決める、チーム1とチーム2で各5人ずつ分かれるぞ。」

そしてくじ引きの結果は
「2年生組に西木野さんと俺がチーム1で3年生組に小泉さんと星空さんがチーム2」
「じゃあボール投げるのはどうする」
「チーム1にウチは譲るよ、こっちは逆転する自信がある」
「東條先輩の意見に対してみんなは」
そうするとチーム1は自信のある顔で俺を見た。
「全会一致、こちらから行かせてもらいます。」
「試合……開始!!」
ボールはネットを飛び越えチーム2の陣営へ。
「行きます」
小泉さんがボールを跳ね返す。だが予想外の場所へ飛んでいくボールを見た絢瀬先輩が……
「サポートするよ、にこ」
「えいやっ!!」
「こっちに来た、ことり!!」
「それっ!! 心咲君」
「任せて……」

その瞬間視界に飛び込んだのは南さんのズボンからはみ出たパンツだった。
「南さん見えて……」
ズガガガン!!
空中に落ちてきたボールは園田さんが何とか敵陣営に物凄い威力でストライクして何とか一点ものにできた、矢澤先輩の腹部にダイレクトアタックして。
その後四戦近く戦って結果は俺の陣営の負けだ、矢澤先輩は気絶して寝込み、園田さんは反省のためチームを抜けたからだ。
そして夕方になって……
「～♪」
カレー作りに一丸となって取り組んでいた。
だが料理経験の乏しい俺はただニンジンの皮むきに精を出していた。だがどうでもいい事だが……
（高坂さんのエプロン姿、凄く可愛い）
心の中でそう思いつつニンジンをむいていたら……
ぐいっ!!
「矢澤先輩、何ですか？」
「頑張って選んできたのに何で無視するのよ」

「何なんですか、目が怖いですよ」
「あーもう!!何で穂乃果にはエプロンでデレて私のエプロンにはデレないのよ!!」
　ああ、言ってる意味は分かったが俺はエプロン萌えではない。
　案の定園田さんに連れていかれた、そうこう言いつつカレーが出来た。
　カレーを皿に盛りつつ持っていく、その時高坂さんはすれ違う時に耳元で囁いた。
「これは心咲君を想って作ったから残さないようにね、旦那様」
　背筋が凍り付いた、はっきり言えばこのカレーにはあのミューズメンバーが作ったもの。
　すなわち女子高生の手料理である、これ以上の幸せなんてない。
「じゃあ食べようか」
　全員席に着き手を合わせスプーンをとりつつカレーを口にした。
「おいしい……」
　何気なく呟いたが高坂さんが反応した。
「良かった、気に入ってくれたんだね」
「今回のカレーのレシピは穂乃果ちゃんのオリジナルなんだよ」
「心咲君が喜ぶ顔を見てるとなんだか嬉しい」
「コラッ、食事中にイチャイチャしない」

そして夕食後

「合宿パジャマコレクションイン西木野家開催ー!!」

心咲別室

「皆楽しそうだな、でも混ざりたいわけではない、こういう時歳がいてくれたらな」

スマホで音楽を聴きつつ持ってきたバンド雑誌を読んでいた、当然身が持たないのは同じだが、ふと思いついた、夜景を見に行こうと、俺はベランダに足を運んだ。

「いい風だ。」

一面アスファルトの秋葉原だったら、絶対夜になっても暑いし風もない、来てよかったと思う、するとなびくカーテンの向こうから見慣れた人影が、それは……

「自室にいないと思ったら、ここにいたんだ」

「南さん、みんなと一緒じゃなかったんですか?」

「心咲君と話がしたかった、気になる事があって」

「その様子だと穏便に済む話じゃなさそうですね」

「一つ聞かせてほしい、心咲君は誰と結ばれたいの?」

その言葉に対する返答はあの時と同じだった。

「まだ分からない、誰が自分の運命の人なのか、その答えを今探してる」

「私はね、心咲君に伝えたい事があるの」

「それは……」
「大好きだよ……
」
その言葉を聞いた俺は言葉を失った、初めて大好きと言われたことに。
「でも、この願いは叶わない、心咲君が誰が好きか考えてるように、心咲君を想ってくれる大切な人がいるから。その人と、幸せになって」
その言葉を聞いた俺は涙が止まらなかった、初めての好きがこんなに儚く終わる事に。
何も残す言葉も無く俺はただ涙を拭うとムシャクシャな心で壁を殴った。
「最低だ……俺……」
ただ悔やむ事しか出来なかった。

第１２話　不確定性感情論

合宿から約４日、俺は頭を抱えつつ悩んでいた。
南さんに対して返す言葉も無かった俺自身をむしろ罵倒したいぐらいだった。
ダメ男の烙印を自分で押した感じであやふやになってる。
今の自分はただ悔やむしかなかった。
そんな時、突然インターホンが鳴り響いた。
「心咲君、私だよ」
扉を開けると穂むらの紙袋を持った高坂さんが立っていた。
「高坂さんか、珍しいな、訪ねて来るなんて」
「実は新作の和菓子何個か持ってきたんだ。心咲君の意見が聞きたくて」
「ありがとう、丁度甘い物が欲しかったんだ」
「あ、心咲君、後ろに……」
振り向けば母さんが物凄い微笑みでこちらを見ている。
「場所を変えよう、喫茶店にでも行く？」
「いや、べ、別に迷惑じゃないけど……」

すると少し照れつつ心咲に呟いた。
「心咲君の家、あがってみたいな……」
その言葉を聞いた俺は少し驚いたが母さんがガッツポーズしてた。
そして高坂さんを俺の部屋へ案内した、まさか自分の部屋に幼馴染が入る事になるとは。
「凄くカッコイイポスターの貼ってある部屋だね、何ていうバンドかな?」
「東京サディスティッククラブっていうロックバンドだよ。１９９４年から活動してるんだ、それなりに有名だよ」
「確か心咲君の部活って」
「バンド部だよ、ギタリスト。」
「心咲君が通学時に背負ってる大きなカバンってもしかしてギターだったの?」
「そうそう、一週間の終わりに持って帰ってるんだ」
そう言いつつ持ってきたようかんを口にした。高坂さんはニコニコしながら俺を見る。
「流石は高坂家、良い物を作るね、おいしいよ」
その言葉を聞いた高坂さんは顔を赤くしつつ、喜んだ。
「心咲君、さっきの笑顔可愛いよ」

「えっ？」
　すると高坂さんは俺の目の前でこう言った。
「キスとハグ、どっちがいい？」
　俺はその言葉を聞いた瞬間自分の中の何かが壊れた気がした。思考回路が停止して手が伸びる。
　高坂さんの身体を抱き寄せると高坂さんは少し喘ぐ声を出した。
（俺にとって今、何が正しいのか分からない、高坂さんは俺にとって……）
　すると俺は我に返り高坂さんの身体から手を離した。
「ごめん、高坂さん。こういうのはやめた方がいいと思う」
「そっか・・・心咲君はまだ答えが見つかってないんだね」
　高坂さんも我に返り俺から少し離れた。
「少し飲み物を持ってくる、ここで待ってて」
　そして俺は逃げるようにコーヒー缶を取りに行った。
　一方で高坂さんは部屋の本棚を探っていた。
「ほとんどバンド関係の雑誌だ、ちゃんとナンバリングもされてる」
　すると高坂さんは雑誌の横に一冊だけ置いてある写真アルバムに目を付けた。
「心咲君の昔の写真かな、大分開いてないみたいだけど」

開くとそこには俺の写真がたくさんあると同時に高坂さんと出会った頃の写真が残っていた。
だが高坂さんはその写真に数枚くらい覚えのない女性が映っていた。
「この人、誰だろう？凄く綺麗な人だ」
「その写真、誰にも見せた事ないんだ」
少し寂し気な様子を見せつつコーヒー缶を高坂さんに手渡した。
「ご、ごめんね、勝手に見て……」
「いいよ、怒る事の程じゃないし」
お互いの沈黙、俺は少し考え高坂さんに話す事にした。
「知ったのであれば、話す以外無いみたいだな」
「何か隠してるの？」
「全て話すよ、３年前、俺の身に起きた事件を」
俺はコーヒーを渡しつつ高坂さんの隣に座った。
「その写真に写ってるのは、心咲楓、俺の姉さんだ」
「えっ、お姉さんって、心咲君一人っ子のはずじゃ」
「それは今の話、本当は姉がいた」
唐突すぎる話に状況がいまいち分からない状況になっている。

高坂さんは凄く驚いてる。
「俺はいつも姉さんの後ろに隠れてるような人見知りだったから自分には安心できる数少ない人だったよ。自分にとって高坂さんと同じぐらい大切だった」
「そのお姉さん……今はどうしてるの？」
高坂さんは何か嫌な予感を感じてるみたいだった、俺は真剣な顔で口を割った。
「3年前、姉さんはストーカーに殺された」
「！」
「3年前の１０月辺りから黒服の男が俺と姉さんの後をつけてた。薄々気が付いていたけど、気のせいだと思って知らないフリしてた。でも１０月の終わりの頃、姉さんはコンビニでバイトをしていた。丁度俺も買い物をしていたんだけどこの日が自分の全てが狂った日だったんだ。黒服の男が押し入ってきて姉さんをナイフで殺した、俺は死んでゆく姉さんを抱きしめながら泣いた。黒服の男もその後死体で見つかり、この事件は闇の中に消えた」
高坂さんは話を全部聞くと辛そうな顔をして俺の手を握った。
「そんな酷い事件に、心咲君が……」
「自分はそのストーカーの事に気づいていた。でもそれを伝えなかったから姉さんは死んだ、自分の嘘が姉さんを狂わせた、ずっと後悔してるよ。今の自分も」

「まさか……心咲君が嘘を嫌う理由って……」
「自分がそう言う境遇の人間だからさ」
「……」
　不安の募る会話でお互い返す言葉も無かった。そんな時部屋の扉が開き……
「驚いたわ、護が楓の事他人に話すなんて」
「全部聞いてたのか」
「ずっとね、それよりこれ、穂乃果ちゃんに私からロールケーキよ」
「ありがとうございます」
「じゃあ、俺はそろそろスクールアイドルの仕事に戻るよ」
「無理しないで頑張ってね。じゃあ私はこれで」
「ありがとう、高坂さん」
　そう言いつつ高坂さんは手を振って帰っていった。
　それから数日
「よし、ダンスの構成は出来た、後は彼女たち次第」
　ペンを止め、乾燥野菜チップスを食べつつスマホに手をかけた。すると……
「何だ、このメール誰だ」
　メールを開くとそこに書かれていたのは。

「秋葉原駅前喫茶店で会いたい、話したいことがある」
その言葉を見た俺はメールの主に会う事にした。
秋葉原駅前
「この喫茶店か、メールの主はどこに？」
すると一人の若者が声をかけてきた。
「あなたが心咲さんですね。」
「メールの送り主か。」
「はい、木原トウジといいます。楓さんの弟の護さんですよね」
「姉さんを知っているのか？」
椅子に座りつつブラックコーヒーを頼む。
「はい、姉さんを殺したのは僕の兄ですから」
「木原さん、あのストーカー男の弟なのか」
「はい、3年前の事件で自分も辛い人生を送りましたから。事件当時楓さんの死体を抱いて泣くあなたを見ていました。兄のせいであなたに酷い苦しみを背負わせてしまいました。僕はあの事件以降学校にまともに通えず、メンタルケアを受けながら生活しています。今日あなたに出会うのも少し躊躇してました。きっと傷ついてるだろうと」
「つまり木原さんも俺と同じ3年前の事件で、狂った人間って事か」

「あなたにメールを送れたのは兄の手帳にあなたのメールアドレスが書かれていたからなんです。自分も過去に触れるような事は避けてきましたけど、あなたには話すべき真実がある。だから呼んだんです」

コーヒーを飲み込むと心咲は木原に尋ねた。

「姉さんとあんたの兄さんはどんなつながりがあったんだ」

木原さんは頭を抱え語り始めた。

「３年前、兄貴と楓さんは恋人だった。学年は兄貴の方が上だったけどそれでも兄貴は楓さんを大事にしてた、とても微笑ましかった。でもある夏の日、当時美術部だった兄貴は高校最後のコンクールに出す絵画に力を出していた、でもある時その絵画を何者かに台無しされてコンクールに出展できなくなった。そこから兄貴は自分を責め続ける毎日を送りそんな兄貴を支えたのは楓さんだった。でも兄貴の一言が原因で兄貴は楓さんを失った。すべてに絶望した兄貴は自分で全てを終わらせるためにストーカーになって楓さんを付け狙ってた。ただ兄貴はナイフを取り出す度泣いてたのを見た。本当はこんな事したくなかったんでしょう。そして１０月の終わり、あの事件は起きて楓さんを殺した後自分で首を切って自害した」

すると木原さんは俺に対して頭を下げた。

「兄貴がしたことは本当に迷惑に思ってる、止められなかった俺のせいでお前に悪い事

をした。本当に・・・本当にすまなかった!!」

俺は何も言えなかった。ただ残ったのは心に住み着いてた闇が自分の中で大きく蝕んでいく感覚だけだった。

第１３話　救済の女神

夏休みの最中、俺は外に出るのをやめた。
母さんには気分が悪いと伝え、部屋のベッドでただ虚ろな目をしながら横たわるだけだった。
ラブライブ県大会まで後2週間、ノートこそ出来たものの今の自分は外に出る勇気も無ければノートを渡しに行く気力も無い。
俺の中の何かが壊れている。何故なら憎むべき姉を殺した男も実質被害者だったのだから。
今の俺は暗い闇の中に閉じ込められてるような感覚でまるで全てを奪われたようだった。
その頃・・・
「心咲君、どうしちゃったのかな……全然連絡来ないけど……」
南さんは携帯を片手にクレープを食べていた。
同じく不安な顔をする園田さんと高坂さんも携帯をじっと見つめる。
通話履歴には俺の名前と不在のマークだけ。嫌な予感が頭をよぎる。

そんな中園田さんは異な事を口にした。
「もしかしたら、心咲さんは何か塞ぎ込んでいるのでは……」
その言葉を耳にした瞬間高坂さんはあの時聞いた俺の姉の事を思い出した。今まで黙ってた高坂さんは……
「ごめん、用事できた。すぐに行かないと!!」
「穂乃果ちゃん、急にどうしたの?」
高坂さんは一目散に走っていった。そんな高坂さんを見た園田さんは……
「何だろう、不吉な予感がする」
そう呟くと園田さんは手を軽く握りしめた。
そして高坂さんは
「やっぱりあの話は心咲君の心の傷だったんだ。もし話を聞いた私が原因だとしたら、心咲君は元には戻れないかもしれない。傷つけたのなら、謝らないと」
がむしゃらに走る高坂さんは俺の家の前まで来た。
その様子を窓から見た俺は空虚な声で呟いた。
「高坂さん……君は俺の……何なんだ」
その頃玄関では
「心咲君、部屋から一度も出てないんですか」

「ええ、この前から元気がすこぶるなくて……今までの経験で護が他人と会いたがらないなんて初めてなの」

高坂さんは十中八九私のせいだと確信した。本人はとても気にしている。

そう思った高坂さんは母さんに質問した。

「心咲君から楓さんの事で何か聞きましたか?」

すると母さんは少し不安な顔で答えた。

「数日前に護、ある人物から3年前の事件の真相を聞いたと言っていたわ。その人物は楓の彼氏の弟さんと聞いた、本人がこんなこと言ってたわ、皆、罪なき被害者だったって」

その言葉を聞いた高坂さんは俺が聞いたことは何も分からなかったが触れてはいけない禁忌であることを察した。

そんな二人の会話を物陰から聞いていた俺は勇気を出して扉を開けた。

「心咲君、部屋から出たの!!」

「あんまりいい気分じゃないんだ、何か重くのしかかってるような感じで」

その言葉を聞いた高坂さんはひたすら俺に頭を下げた。

「ごめんね、心咲君の辛い事を分からずにあんなことを聞いて、嫌だったよね。本当に……本当に……」

その言葉を聞いた俺はここまで俺を心配してくれた高坂さんに少し罪悪感を感じつつ高坂さんの頭を撫でた。
「俺の方こそごめん、心配させるような事して、でも高坂さんは何も悪くないよ。むしろ感謝してる、ありがとう。」
「心咲君……一人で抱え込むより、私を頼っていいんだよ。心咲君はいつも私に助けられて、一人になると泣いちゃう、そんな心咲君だから私は助けたい。これから辛いときは私の……」
高坂さんは涙をこらえながら俺に抱き着いた。
「私のそばで……泣いていいんだよ」
その言葉を聞いた俺は心の中で情けなく思ってしまった。
(変わったとと思ったら、何も変わって無かった。結局俺は高坂さんに助けられるのがオチだな、俺はどこまで変わっても弱虫って事か。でも、それもいいや。)
「俺の部屋で、少し寄り添ってくれるか。心が軽くなるまで……」
「心咲君の為なら、ずっといるよ」
二人は部屋に行くとベッドで身を寄せ合った。
翌日
「ただいまー。」

「お姉ちゃん朝帰り？心咲兄さんと何してたの」
「い……いやその……」
　高坂さんの反応を見た妹さんはとんでもない事を聞いた。
「もしかして、デキちゃった？」
「雪穂それセクハラだよ!!」
「あはは、冗談冗談、別に無理に聞こうなんて思ってないよ」
　妹さんにいじられる中２週間の間に本番に向けて準備を進めていた。
「ライブで使う音楽は出来た。後は心咲君がダンスの振り付けが間に合えばほぼｏｋよ」
「信じて待ちましょう、心咲さんを」
　ピンポーン
「西木野さん、ダンスの振り付けの項目、全部終わりました。後は皆さんに委ねます」
「あなたならやってくれると思ってました。メンバーを呼んで早速実践してみます」
　すると俺は南さんに電話をした。
「どうも心咲です。」
「心咲君、良かった～ようやく連絡付いたよ」
「心配かけて申し訳ありません、ライブの衣装の方、どこまで進んでますか？」

「あと４日で出来るかな、一応絵里ちゃんや花陽ちゃんにも手伝ってもらってる」
「４日なら好都合だ、ダンスの振り付けの紙、ＦＡＸで送っとくよ」
「ありがとう、こっちは任せて、最高の物作るから」
「期待してるよ」
　すると西木野さんがドリップタイプのコーヒーを俺に渡した。
「練習用のスタジオ、何とか手配で来たわ」
「ありがとうございます。ここからが正念場ですからね」
　そして俺はコーヒーを飲み干した。
「絶対成功させましょう、音ノ木坂の未来の為に」
　俺たちはただ遊ぶことを忘れ、ライブに向けてみんなひたすら練習に打ち込んだ。俺の指示が無くとも彼女たちは自分たちでやれるようになり俺はカメラを回しながら彼女たちの練習を撮影した後、この２週間で撮った映像をよく見てブレがないか確認した。
　完璧なまでにシンクロした動きで自分も勝てる確信がつき始めた。
　衣装も完成してスタジオでの練習も様になってきた。
　そして２週間とにかく俺たちはやれるとこまでやり、全てをぶつけられる実力を身に着けた。そして大会前夜……

「明日はいよいよ本番、この大会で勝てば冬の全国大会、でも勝てるかどうか分からないって言うかこんな夜遅くに何考えてんだ……俺……」

うまく言ってるが故に怖さもある、怖気づいてしまう前に夢に落ちることにした。

そして翌日

ラブライブの会場に俺たちは来た。多くの報道陣やファンが集う中俺はランキングを見つつコーヒーを飲んでいた。

俺は時計を見て立ちあがった。

「そろそろ向かうか、高坂さんたちのライブを、この目で見届けるんだ」

そして俺はサイリウムを手に持ちスイッチを押した。それと同時にアナウンスが入る。

「続きまして、国立音ノ木坂学院、ミューズによるステージです。タイトル

僕らは今のなかで　、総監督、心咲護」

そしてライブが始まった、高坂さんを中心としたパフォーマンス。

彼女たちのそれぞれの特色を生かした歌声は自分の周りにいたファンが目を輝かせていた。

俺と皆で作り上げたこのプログラムには俺も正直ワクワクしてる。

そしてライブは終わりを告げると、彼女たちに数え切れない程の祝福が贈られた、だ

がまだ安心とは言えない、ランキング１０位までに入らないと俺たちの夢は無意味になってしまう。

そしてその後もプログラムは続き、そして運命の結果発表。俺たちは……

ランキング２位、本戦に出場を果たした、みんな泣いて喜び、俺は高坂さんとハイタッチした。そしてその後は……

東京湾公園

「本当に夢みたいだよ、まさか２位になるなんて……」

「ここまでやれたのは全部心咲君が私たちを導いてくれたから」

「本当に感謝したいのは、高坂さんだよ」

「どうして、そう思うの？」

「高坂さんが、俺を救ってくれたじゃないか、そのおかげで俺は前に進めた。高坂さんも俺を導いてくれたんだよ」

「私は、心咲君が信じてくれたから、それに応えただけ、何も……」

すると俺は高坂さんを抱きしめ、涙を流しながら……

「それでもいい、高坂さんにとって些細な事でも、俺にとってはすごく嬉しいんだ。高坂さんが俺を守ってくれるなら、俺は導きたい、約束するから、本当にありがとう」

高坂さんも涙を浮かべながら俺の腰に手を当てた。

「これからも、お互い助け合っていこう、心咲君は私の憧れだから」
夏は終わり、秋を告げる、この先、俺は何を選ぶのかは分からない。
まだ始まったばかりだから・・・。
ＥＮＤ

シーズン2
第14話　夏の終わりと生徒手帳

夏休みの終わり、次の学期に入った俺たちは始業式に参加していた。
夏が終われば季節は秋になり様々な学校行事やイベントの連続だ、でもラブライブの事は決して忘れるわけではない。
冬の大会に向けて大きくプランを考えなくては、そして始業式が終わりこの後高坂さんたちと出会う約束をした。
向かうは近くのファミレスである、学校の始めと言うだけあって昼間は高校生でいっぱいだった。
中に入店していくと……
「心咲君、こっちこっち」
大きく手を振る高坂さんに呼ばれ、高坂さんの隣に座った。
「それより聞いてくれ。以前上げた動画、再生回数３０００万突破したの見たか？」
その話を聞くと園田さんは飲んでいたジュースを置き目を輝かせて答えた。
「今でも信じられないですよ。私たちがラブライブで2位で本戦に出れることになりあ

れからテレビや雑誌の取材で持ちきりだったんですから。本当にここまで頑張って良かったと思ってます!!」

「園田さん、今日やけに輝いてますね、別人なくらいに」

いつもと違う園田さんにペースが狂うが話には乗っておこう。

「まあ、あの後テレビや雑誌に取材されたのはいいけど俺、あの後から音ノ木坂の生徒に写真やメアドとかサイン要求されたからなあ、人気になるとなんか大変だなと実感したよ」

すると突然、高坂さんは雑誌を取り出して自慢げに俺に見せた。

「この写真付きインタビューに書いてる私の助けてくれた人って誰だと思う?」

心の声が顔に出てるからバレバレである、ため息をつきつつ答えた。

「それ、俺の事言ってるのか」

「流石心咲君、わかってるんじゃん♪」

何でこう高坂さんはわかりやすいのか、それに気づいてない高坂さんに少し引っかかる物があるがあえて乗って喜んでいるだけ満足としよう。

ただ一つだけ違和感をを俺は感じていた。

そう、一言も会話していない、南さんだ。何かソワソワしてるように見えるがここは声をかけておこう。

「ところで南さんはその後取材とか受けましたか？」
その反応は……
「受けたは受けたけど……そう大した質問じゃなかったから、いいかなって……」
何となく違和感を感じた俺はこれ以上南さんに声をかけるのをやめた、すると園田さんは俺にこう伝えた。
「今朝からことりはこんな状態なんです、私には理由はわかりませんが、できる限り気を付けてください。何するか分かりませんから」
それに対して俺は小声で園田さんに……
「放っておけるわけがないだろ、また何か南さんが悩んでるなら相談に乗るべきだと思う」
「だけど心なしか何か目がとろけてますよ、もしあなたの案件だったら嫌な結末になるのは目に見えてるんです」
その様子を見た高坂さんは二人の聞こえない会話を見て
「なんか怪しい話の予感がするんだけど何を話してるの？」
「単なる次の楽曲の打ち合わせだよ、ただちょっとしたサプライズ提案をしていただけ。何も怪しいことは無いよ」
苦し紛れにに言った嘘だが園田さんがフォローをする。

「ことりの誕生日があるのでそれの企画です。良ければ穂乃果も協力してくれませんか？」
その言葉を聞いた高坂さんはぱっと目を輝かせてこの件を承諾した。
さて俺はまず南さんの事について少し調べることにするか。
とりあえずコーヒーを飲み終えて園田さんと高坂さんが帰ったら直接聞いてみよう。
そして……
「じゃあまた明日」
「さようなら」
二人きりになったところで話を聞こうとすると
「じゃあ私、そろそろ帰らないと」
「あっ待って南さん話が」
南さんは笑顔で帰っていった。
「弱ったなあ、また明日聞いてみるとするか、今日はもう俺も帰って……あれ？」
すると道端に黒い手帳、間違いなく生徒手帳だった。その手帳の名前を見た俺は……
「きっと困ってる、届けに行こう」
それは南さんの生徒手帳だった、南さんの家なら前に教えてもらったのだがまだ行った事が無い、不安に駆られつつも俺は南さんの後を追った。

南さんの家

「生徒手帳を返すだけとは言ったけど女の子の家に入るのは相変わらず慣れないな、きっと親がいるはずだし……事情を伝えて立ち去るとするか」

そう言いつつ俺はインターホンを鳴らした。だが……

「反応が無い、おかしいな?」

家にはいるはずだ、だが反応しないのは何故だろうか。

不安に駆られた俺はポケットからキャラメルを取り出し、口に入れると迷い無く扉を開けた。

「すみませーん、誰かいませんかー!!」

反応は無く自分は嫌な予感を感じた、玄関には南さんの靴があるため中にいるのはわかるがこの家のどこかで何かあったのか、はたまた見られてはならない大事な事をしてるのか。

どちらにせよ何かあれば警察や病院をすぐ呼べるようにしてあるため対応は万全である。

そして俺は南さんの家の奥に足を踏み入れた。

「リビングには居なさそうだな、となると自室にいるのかな?」

そう思いつつ二階に上がると半開きの扉の部屋があった、そこだけ光が差し込んでい

る。そして扉を開けると……

「み……南さん!!」

部屋の中でほぼ下着の見えた状態で顔の赤い南さんが倒れていた。

まだ幸い意識がある。

「南さん、聞こえますか、俺です、心咲です!!」

その声を聴いた南さんはかすれた声で心咲に今の状況を伝えた。

「それ……その箱の……体が、熱くなって……」

その言葉を聞いた俺は南さんの指をさした方向にある箱を俺は手に取った。

「これは、何かのチョコレート」

疑問に思いつつ俺はチョコレートを一つ手に取って匂いを嗅いだ。すると……

「これ、ただのチョコレートじゃない、ブランデーチョコレートだ」

恐らく南さんは1日前にこのブランデーチョコレートを何個か口にした。

それでアルコールが回って体温が普通より上がっていた。

それで今朝の様子がおかしかったんだ、どおりで下着姿のまま倒れてたわけだ。

とりあえずこのままにしておけないので南さんを俺はベッドに寝かして自分が持っていたハンカチを濡らして南さんの額に当てた。

俺は少しベッドの下に座り、ため息をつきながら呟いた。

「まさか俺が女の子の看病をする羽目になるとはな、何の因果か分かんねえけど、ははっ、やっぱ一人にはさせられないな、女の子は」

自虐をと人情の混じった言葉を綴り、疲れていたのか俺は少し眠りについた。

しばらくたって俺は目を覚ました時計の針は5時を指していた。ふとベッドを見るとそれは……

「南さんがいない」

目を離すといなくなっていた南さんに慌てて、扉開けると部屋の照明がつき、そこには……

「あっ心咲君、目覚めたんだね」

いつもの南さんに戻っていた、少し安心した俺はポケットから生徒手帳を取り出した。

「勝手に上がって申し訳ありませんでした。後これは忘れ物です」

「それ、私の生徒手帳、届けに来てくれたんだ」

「本来ならこれを届けて帰るはずでしたが、こんな事になってて……」

すると南さんは急に俺の身体を抱き、ソファーに倒れた。

「心咲君のおかげで私は救われた、なのに私は心咲君に何も返せてない。助けられてば

かりの私には……こうする事しかできないけど……」
　その言葉を聞いた俺は優しく南さんの頬を撫でて笑顔で答えた。
「十分返せてるよ、南さんがそう思ってくれるだけでも俺は嬉しい。見返りなんて俺は求めてないから、ありがとう、ことりちゃん」
　すると南さんは涙をこらえながら俺に呟いた。
「優しすぎるし、反則だよ、心咲君」
「それでも……俺は南さん笑顔が好きだよ……甘いくらいに……」
　そのあと南さんはその日俺と離れるのを嫌がって俺は南さんの家に一晩お世話になった。

第15話　緋色の晩餐会

週末の朝、南さんの家で夜を明かして俺はベッドから身体を起こした。
昨日の一件でずっと南さんの身体に触れていた感覚がする。
そして何より南さんの言ったあの言葉、「笑顔が好き」と言う言葉を思い返すと体が熱くなる感じがした。
俺のこの感覚が何なのかは分からない、でも受け入れたらいけない気持ちである事は何となく感じている。
「って俺は一体何を考えているんだ。」
ふと冷静になってベッドの隣の通学カバンからキャラメルを取り出して口に入れて一度考えていたことをリセットした。
スマホを手にした俺はリビングへと階段を下っていった。
「おはよう、心咲君。」
キッチンで朝食を作る南さん……だったのだがとんでもない姿をしていた。
「な、なな、何ですか、その姿……」
「何って下着エプロンだけど何か問題でもある？」

「問題点とツッコミどころしか無いんですけど!!」
「心咲君への特別サービスだけど」
「とにかく服着てください!!誰かに見られたら一大事ですから!!」
　ピンポーン
「あっ、誰か来たみたい。心咲君出てくれる?」
「はい」
　俺はリビングを出て扉を開けた、だがそこにいたのは……
　ゴゴゴゴゴゴゴ
「おはようございます。心咲さん……」
　俺の目の前で真っ黒なオーラをまとった園田さんが立っていた。
「こんな早朝に心咲さんがいるとは奇遇ですね、どういったご用件でここへ?」
　全身の身体から震えの止まらない俺は感づいていた。もう駄目だと……
　そして後ろから
「海未ちゃんいらっしゃい」
　ピシィ!!
　自分の中でとてつもない地雷を踏んだ音がした。
　南さんは下着エプロンのまま園田さんの前に姿を現してしまった。

それを見た園田さんは……

「早朝からまさかそんな破廉恥な姿で一緒にいたのですか!!」

園田さんは足のホルスターからコルトパイソンのリボルバーを取り出すと不気味な笑みを浮かべて南さんに突きつけた。

「待ってくれ、これは事故なんだ。南さんに罪はない、話を聞いてくれ！」

その言葉を聞いた園田さんはリボルバーをホルスターにしまい丁寧な口調で答えた。

「わかりました、話を聞かせてもらいましょう」

そして園田さんは家に上がって一緒に朝食を食べながら何があったのかを説明した。

「ブランデーチョコレート、それがことりの様子がおかしかった原因というわけですか」

「ごめんね海未ちゃん、心配かけちゃって」

「本当は落とし物の生徒手帳を渡して帰るつもりがそう言う理由があっての事で……」

「それの後に一緒に泊まったという事ですね。何か変な事してませんよね？」

「まあベッドで心咲君と抱きしめて寝たぐらいかな？」

「な、そんな……恋人同士でもないのにそのような行為を!!」

園田さんが顔を真っ赤にしながらガタガタ言ってる。

まあ自分も南さんの下着エプロンにガタガタしていたし、この辺りは俺と似てるんだよなあと思ってしまう。

「と、とにかく抱き合って寝た以上の事はしてないんですね、ですがこれ以上の事をするのは常に控えておいてください。わかりましたね」
「以後気を付ける」
その後南さんの家から自宅に帰ることにした。
ただ母さんには南さんの家に泊まった件に関してはあえて話さない事にした。
手にコンビニのドリップタイプのコーヒーを持って自室で次の練習プランを考えていた。すると後ろから……
「ことりちゃんとの夜はどうだった？」
母さんの一言に衝撃が走った。
「母さんそれ何で知ってるんだよ!!」
「さっきことりちゃんが手作りクロワッサン届けてくれたの、ことりちゃんが昨日の夜はありがとうって言ってくれたから何のことか分からなかったけど、まさか護がことりちゃんの家に泊まってたなんて。この罪な男～♪」
物凄いやましい顔で話す母さんに少し腹が立つがそれを表に出さずに答えた。
「言ってもそんなに不純な事俺は何もしてないからな、そういうのは女の子の尊厳が傷つく行為であって高校生のタブーだからな」
俺はきつい目で反論した。すると母さんはつまらなそうな顔で部屋を後にした。

すると……

「あの貧弱に見えて芯のしっかりした感じ、お父さんとそっくりなのよね～。ちゃんと間違いを正せるのもいいけど護にはしっかり女の子の向き合い方を知ってほしい物ね」

何かご機嫌な母さんを俺は知る由も無かった。その頃俺は……

「……なるほどな～女の子ってそこまでデリケートじゃないのか」

南さんの愛読書、ラブチューンズを読みながら音楽を流していた、恋愛情報誌なだけ楽曲は恋愛曲の多いハートナンバーというバンドグループ。

この類の楽曲はあまり聴かないがあえて聞いてみることにした。

恋愛曲よりカッコイイ系のｊポップの方が専門なのだが、音楽を聴きながら雑誌を見てると何か思い浮かんだ。

「もし、高坂さんと一日デート出来たら……どれだけ嬉しい事か……」

そう思うと自分の心臓が高鳴った、想像するだけで顔が熱くなる。

「そっか……俺は……高坂さんが好きなんだ……」

何か納得している自分がいた、少し舞い上がってる気もしなくないけど。

すると俺の電話が鳴り、画面を見ると……

「西木野さんからだ、楽曲出来上がったのかな？」

そして俺は電話に出た。

「どうも、心咲です、楽曲出来ましたか？」
「開口一番に楽曲要求するとはね、こっちの方はもう完成済み。そっちは無理してない？」
「いえ、何とか昼前にはダンスの振り付け表完成しましたけど、特に無理はしてないかな。休息もちゃんととってるし」
「それなら、今夜時間あるかしら？」
「は？」
　急に時間あるなんて言われる事に少し何かを察した。
「ありますけど、これからどうするんですか？」
「時には羽休めも必要なのよ、外食にでも行かない？」
　外食か、確かにここしばらく店屋で食べてなかったような。
　夏休みはほとんど西木野さんの所有している島で夏休みを謳歌したりして楽しかったけど食事も健康的な物ばかりだったからなあ、少し贅沢してもいいかな。
「わかりました、店はどこですか？」
　だがそれを聞いた俺は戦慄することになった。
「六本木ホテルのビュッフェよ、一人６万円クラスの」
「ろ、六万――――――!!」

てなわけで……

六本木のホテルのビュッフェへ

「本当にここ入るんですか、どう考えても高校生の入るような店に見えないんですが大丈夫かな……」

「心配いらないわ、今回の晩餐会は私たちだけだもの」

「えっそれって二人だけ……」

「二人なんて言ってないわよ、そろそろ来るから」

「それってまさか……」

すると黒い車が一台来る、その中から……

「六本木や～大人の街～!!」

「希、気持ちはわかるけど静かにね」

「ここで夜ご飯とかにこにーついてる～」

車から出てきたのは紛れもないミューズだった。その中にいる彼女、高坂さんが俺に近づいてきた、すると……

「私と一緒の席だから、よろしくね!」

その無邪気な笑顔に少し照れつつ俺たちはビュッフェに向かった。そして……

「エビグラタン、シーザーサラダにサーモンマリネ、やれやれ、やっぱ偏るなあ」

料理をとってる最中後ろから西木野さんが囁いた。
「光栄に思いなさいよね、せっかく穂乃果と一緒にいられる時間と場を作ったんだから。あなたにはアプローチが足りないからここで思う存分アプローチしなさい」
西木野さんはそう言うと料理を持って、席に戻った。
（西木野さん……わざわざ俺の為に……）
「心咲君見て、選んだ料理、お揃いだね!!」
「他にもあるだろ、選ばないのか?」
「だって、いつだって一緒だったから、その……」
「一緒か、今夜だけは……俺の高坂さんだ」
その言葉を聞いた高坂さんは俺の側にずっといた。
西木野さんに感謝するとしよう。

第16話　苦悩無き幸福

ミューズ合同のビュッフェから3日が経った頃、俺はある人物と喫茶店で待ち合わせしていた。

木原トウジ、俺と同じ三年前の事件で心に傷を持つ事件の関係者だ、あまり思い出したくない過去であり思い出すたびに不安定になるが今回そんな木原トウジを何故呼び出したのか、彼は事件の事がトラウマになり外に出る事も無い、いわば引きこもりになっている。

だが最近は……

「護さん、お待たせしました」

「木原さん、お久しぶりです」

木原さんは俺の向かいの席に座った、今回木原さんを呼んだのは他でもない。

ある事を聞くために呼んだ。それは……

「木原さんお礼を言いたくて、木原さんがラブライブの掲示板に俺たちの事宣伝してくれたおかげでミューズのファンが増えたんです。本当にありがとうございました」

「護さんが主幹を行ってるスクールアイドルですからね。僕もアイドルは好きなので、

何よりあのｐｖとライブステージを完成させた護さんに勇気をもらいましたから。少し宣伝させていただきました」
「それだけでも十分です」
「それと護さんのおかげで少しづつですが学校にも通ってるんです」
「学校に戻れたんですか!!」
　その言葉を聞いた俺は少し飛びついてしまった。
「まだ午前中しか持たないですけど、友達も増えて少しいい方向に進んでるかな」
　その言葉だけでも自分にとっての喜びになった。
　ファミレス某所
　ズーン
　落ち込んだ様子の小泉さんに対し東條先輩が笑顔でオレンジフロートを飲んでいた、少しアイスを口にすると東條先輩は話題を切り出した。
「花陽ちゃんはウチをここに呼んだ理由、聞かせてくれへん」
「希ちゃん……私って心咲君からどのように見られてるんでしょうか?」
「その様子だと、これまでのアプローチ全然効いてへんみたいやな?」
「以前ことりちゃんからとんでもない事を聞いてしまったんです」
「とんでもない事?」

「はい、そ、その……心咲君と一夜を過ごしたと聞いて、本人が心咲君と抱き合ったと……

」

「それはつまり……」

以下東條先輩の妄想

『ハンッそこ……敏感になってるから……触られると体が……アンッ!!』

『南さん身体はもう俺の物だ、もっとメチャクチャにしてあげるよ』

「夜のディーププレイを……」

「そんな破廉恥な事、心咲君は絶対にしないから!!」

やったら園田さんに殺されます。（汗）

「とにかく今の私にできるアプローチでは心咲君にはあまり効果が無いですし」

「何か大胆なアプローチを考えんとな、このままだとことりちゃんに良いところ取られたままやしなあ、どうするか?」

「私も心咲君を家にあげた方がいいのかな、そうすればそれなりにアプローチできると思うんだけど」

「でも心咲君は結構ガードが堅いで、普通に夜に家に来てくださいなんてシチュエーションから本人は拒否すると思うんよ。それだったら何か口実考えんと」

「むしろ本人は『夜に女の子の家にあがるつもりは無い』ときっぱり言いそう」
小泉さんと東條先輩が悩む中、その頃俺はメイド喫茶、キュアメイドカフェへ南さんに会いに行っていた。
幸い夕方なのでそれほど混んではいなかったが二人でコーヒーを飲みながら話をしていた。
「ネット掲示板？」
「そう、俺の知り合いがミューズの事宣伝してくれてさ、ｐｖの閲覧者数が増えたんだよ。掲示板のトレンドデータにミューズが上がる程になったんだ」
「良かった、ファンが増えてくれて」
「ラブライブ本戦までまだ時間があるから俺も新しいダンスの振り付け考えないと」
「頑張ってね!!」
「じゃあ、俺も帰るよ。ありがとう」
店を出た俺を見送る南さんはこう呟いた。
「今度心咲君の家にお弁当作って届けようかな？」
穏やかにそう呟いてコーヒーカップを片付けた。
家に帰った俺はダンスの振り付けを考えながらノートに書き記していく。
実際振り付け再現してみたりしながら机に向かっている内に時計を針は午後５時を

指していた。
「振り付けを２００から７０に絞る作業は楽じゃないな、結局２時間かかった」
そう言いつつコーヒーを取りにリビングへ向かう。
扉を開けると母さんが紅茶をのんでいた、何やらご機嫌そうだがとりあえずは缶コーヒーを冷蔵庫から取り出しタブを開けた。
すると母さんの横には何かのケーキの箱が置いてあった。
「母さんやけに嬉しそうだな、良いケーキでも貰ったのか？」
「このケーキは人に渡すものなの、護に行ってもらおうと思って」
「俺が……誰に渡すんだよ」
「護は小泉花陽ちゃんの事を前に話してたわよね？」
「小泉さん!!」
思いっきり驚いてしまった。
「実は花陽ちゃんが護を夕食に誘ってくれてね、本人が料理作りすぎちゃったみたいで、嫌じゃなければ来てほしいと電話で言ってたのよ。というわけで護、行ってきなさい」
母さんから漂う嫌な雰囲気に俺は行くべきか一瞬悩んでしまった。
わざわざケーキまで用意する周到さに少し悩んだ末……
「小泉さんのお誘いなら、行ってこようかな……」

「護も罪な男ね～、何人嫁候補連れてるの？」
「嫁候補じゃなくてただの友達だよ、女たらしみたいなこと言わないでくれ」
そう言って俺は歩いて小泉さんの家へ向かう、その道中の中で俺は南さんの家で起きた出来事に頭を悩ませていた。
俺が女の子の家に行くとロクな事しか起きないのはもはやお約束と言うべきか。
でも誘われたからには行かなければ、この純情草食系かつ防御の強い俺ならきっとなんとかなる……かもしれない、というか何真剣に考えこんでるんだ俺は。
「とにかく今は楽しい事だけを考えていこう。小泉さんの料理、楽しみだなあ」
そう言いつつポケットからキャラメルを取り出して食べると思考を一度リセットした。
そしてようやく小泉さんの家の前に到着した、そしてインターホンを鳴らすと……
「待ってたよ、心咲君」
エプロン姿の小泉さんが出迎えてくれた、小泉さんのエプロン姿、可愛い。
「今日は夕食に誘ってくれたので、後これは俺からの礼としてのケーキです」
「ありがとうございます、さあ、あがってください」
「失礼します」
家にあがり、リビングへ向かうと沢山の料理が並んでいた。

見てわかるが確かにちょっと多いな。そう思いつつ席に座る。
「ご飯も沢山炊きましたからお好きなように、あっ、でもご飯を汚すような食べ方はしないでくださいね」
「小泉さんらしいな、なら小泉さんの言う通りにするよ」
そう言いつつ俺は野菜炒めを口にした。
「おっ、これいけるな」
「はい、普通の野菜炒めと違ってめんつゆを味付けに使ってるんです」
「すごいな、これはご飯がいけそうだ」
「エビあんかけや、魚の煮つけもどうぞ」
ふと思うと小泉さんって結構料理上手だし可愛いよな。
しかもこれで俺とは年下とか……どう考えても俺に積極的になってくれる事が嬉しかったりするんだけど。
まあどう考えても友達としてかな。それ以上の関係は俺も……
そう言いつつ俺は食事を終えると小泉さんと少しコーヒーを飲みながら話をしていた。そんな中小泉さんがある質問をした。
「心咲君って幼馴染の穂乃果ちゃんの事、どう思ってるんですか?」
その質問を聞いた俺はこう答えた。

「自分の存在理由、そして大切な人……かな」
「大切な人……やっぱり穂乃果ちゃんが好きなんだ」
「自分の中でやっと自覚できた。自分が好きな人がどんな存在かを」
「そっか……良かったね……」
　その儚げな様子を見た俺は何か嫌な予感を感じた。
「私は心咲君の事は好きだよ。でも心咲君には好きな人がいるなら、私は心咲君を応援するよ」
　自分の中で何かが暴発した、すると俺は小泉さんの頬を優しく撫でた。
「そっか、小泉さんも俺に……ごめんな」
　小泉さんは俺の身体を優しく抱いた。
「心咲君は好きな人と必ず結ばれて。約束だよ」
「もちろん、小泉さんが応援してくれるなら心強いよ。」
　その後俺は帰り際に浮かぶ月を見上げながら、呟いた。
「苦悩無き選択、このまま臆病になってたらダメだな。俺も……ちゃんと自分で高坂さんを支えないと、そしていつか、自分の幸せを自分で」
　覚悟を決めた俺は月に手を伸ばしたのだった。

第17話　優しき吸血鬼と九人の魔女

月曜日の早朝、スクールアイドル部は西木野さんの所有しているステージでラブライブ本戦に向けてのダンスパフォーマンスの練習をしていた。

カメラと台本を凝視しつつ的確な部分に丸を打っていく。

演技が終わると俺は改善点を見直しつつメモに書き記していく。

「星空さんと矢澤さん、少しお話いいですか？」

星空さんと矢澤さんの演技を見た俺はある部分の違和感を伝えた。

「演技3の部分すなわち星空さんのこの腕の角度をもう少し広げた方が良いかもしれない、矢澤先輩の演技7は少し複雑かもしれないけどクロスからハートでピースサインの順番を強く意識してほしい。そうすればそれなりに見栄えが良くなる。後2セットのうちにこれをマスターできるかやってみてほしい」

すると横でドリンクを持った休憩中の東條先輩が高坂さんに藪から棒に話を振った。

「穂乃果ちゃんはああいう男の子が好きなんやな」

すると高坂さんが顔を赤くしながら東條先輩の方に顔を向けた。

「ここで言わないでくれる、すごく恥ずかしい……」

すると南さんが穏やかな表情で追い打ちをかけた。
「心咲君がいたからこその穂乃果ちゃんだからね、もし本当に恋人同士になったら心咲君は穂乃果ちゃんを大事にしてそうだよね」
「でも心咲君は純粋すぎてある意味過保護になってたり」
「そういう例え話はここでするものじゃない気がするんだけど」
そして椅子に座る園田さんは……
「……」（話が聞こえないようイヤホンで音楽聞きながら知らないフリしてる）
そして俺は……
「西木野さんの仕事が早かったおかげで楽曲とパフォーマンスを合わせる事が出来た。後問題なのはセンターだけどどうしますか？」
「心配ないわ、この楽曲のセンターは穂乃果がやりたいとオーダーがあったから基本センターは穂乃果で中盤からは2年生組によるパートになってるから他に考える事は無いわ。後は心咲君の思うがままにやればいい」
「わかりました、後は任せてください」
俺はそう言うとカメラのカードを引き抜いて新しいカードに差し替えた。
そしてメンバーに合図をかける。
「練習再開、みんな集まれ」

そして俺たちは練習を終えて学校に向かった、学校に着くと屋上で缶コーヒーを開けつつ歳と空を眺めていた、いつもの事である。
「スクールアイドルの方の練習頑張ってるな、お前のツイッター見たけどスゲー良かったぞ」
「ありがとう、ツイッターの閲覧者結構増えたんだ。ミューズのみんなも喜んでる」
「そういうお前に朗報だ、これをやるよ」
歳から渡されたのは一枚のビラだった。その中身を見ると……
「ハロウィン路上ライブ出演者募集求む……」
「今度の日曜日にアキバで行われるハロウィンイベント、そのイベント内でスクールアイドルや歌い手、バンドにシンガーといったジャンルの人を募って路上特設ステージで歌うんだよ。毎年やってる行事だから俺も参加するつもりだったが俺は観客として見る事にした。スクールアイドル部にその枠、譲ってやるよ」
その言葉を聞いた俺はワクワクが止まらなかった。
俺は前々から路上ライブを考えていたが資金や場所の関係で叶わぬ夢だと思っていたがこれほどいい話はあるとは思ってなかった。
ハロウィンイベントでライブ、俺は早速スマホを起動して西木野さんに頼み込んだ。
その連絡を聞いたスクールアイドル部は……

「ハロウィンイベントで路上ライブ!!」
目を輝かせて高坂さんが飛びついた。その様子を見た東條先輩は……
「穂乃果ちゃんはハロウィン好きなん？」
「どうせ穂乃果の事だからお菓子が目当てなだけでしょう」
「海未ちゃんその言い草は酷いよ～」
とにかく参加する事に変わりはない、メンバーは後日コスプレショップに集まった。
園田さんの意見でライブをするのだからデザインやテーマの統一性があった方がいいと言う提案に乗って各ジャンルを考えあった結果、魔女がテーマになった。
尚俺はメンバーたちに好きにしていいと言われたため、吸血鬼のコスプレを選んだ。
後楽曲やダンスは俺が考えていたパフォーマンスの使っていない物を再編集したものを使う事になった。
幸い西木野さんも候補として作っていた楽曲を渡してくれたおかげでハロウィンイベントに参加する条件は全て整った。後は運営に申請を出して当日まで待つだけだ。
夕方ごろには申請が終わり、ミューズがハロウィンイベントに参加するという話はツイッターで広まりコメントも多くなってきた。
ラブライブ予選前のパフォーマンスに期待をしてくれる人も沢山いる事に少しあり

がたさを感じている。
ちなみにライブ運営者から俺を雑誌で見たからぜひ話を聞きたいと言ってくれた。
俺はライブ前にトークに混じる事になる。
その時に何を話すかはまだ考えてないけどその時は俺のラブライブに対する意気込みをここで語ろうかなと思っている。
今回は俺もパフォーマンスに混じる事になってるのはまだ明かしていない。
そしてスマホを消し、眠りについた。
そして2日後……
当日現場にて
「皆仮装して楽しそうだな、これは盛り上がるぞ」
すると高坂さんが大量のお菓子の袋を持って俺の所へやってきた。
「その大量のお菓子どうしたんだよ」
「近くのテントで配ってたから貰ってきたんだ、掴み放題だから気合入っちゃって」
「お菓子の食べ過ぎはライブ前の毒だぞ」
「大丈夫だよ、食べても7個か8個だから」
「十分食べすぎだよ」
そう言いつつコーヒーを飲み干した。

「そろそろ仕事だ、俺はライブの方へ行くから後で見に来てくれ」
「うん、頑張ってね」
ライブステージ
ステージのお姉さん「ハッピーハロウィーン！今日はこのライブステージに来てくれてありがとう、これから前半はライブトーク。ラブライブで第２位の実力で本戦に出場することになったミューズの演技監督、心咲護さんに今回は来ていただきました。」
「皆さんこんにちは、心咲護です。今日はよろしくお願いします。」
「それでは心咲さんに３つの質問をします。まず一つはラブライブ本戦に向けての意気込みや本音を教えてください。」
「はい、スクールアイドルをやろうと思ったのは高坂穂乃果さんのお願いから始まったんです。音ノ木坂の名前を残そうと頑張った結果が今の俺たちだと思います、だからここまで来たのなら全力でやろうと思ってます。皆の声援に答えられるように俺も頑張りたいと思う、どうか応援よろしくお願いします」
「じゃあ二つ目の質問、特技は何ですか？」
「ギターです、バンド部をやってますから」
ここまでは答えられたがラストの質問がまずかった、それは……
「３つ目の質問です、心咲さんの恋愛事情について少し教えてください」

その瞬間俺の頭が暴発した、容赦なく聞いてくる恋バナに顔が赤くなる。
「れ……恋愛事情って、俺好きな人いる訳じゃなくて……」
「もしかして、恋愛に弱い感じですか、ピュアですね～」
「すみません答えられなくて」
その後も様々なライブが続き俺たちの番が回ってきた。そして……
「派手に舞おうか」
指を天に掲げて鳴らすと同時に曲が始まる。
ちなみに今回は俺が全歌詞を歌う事になった。
いつもとは違うスタンスのライブに歓喜の声が上がった。その後……
「ハッピーハロウィーン!!」
ライブ終了後、西木野さんの自宅にてパーティーを行った。
近くのコンビニのハロウィンスイーツを楽しみつつ俺はスマホのツイッターを見ていた。
今回の演技を見てくれた人のコメントに少しニヤリとしながら返信した。

第１８話　想定外男子

ハロウィンステージから翌日の事

「いいのか、飯奢ってくれて」

飲食店の並ぶ道を歩きながらパンフレットを見る。

昨日のハロウィンイベントの参加を俺に譲ってくれた歳がわざわざ飯を奢ってくれる事になりショッピングモールの飲食店を歩き回っていた。

悩んだ末に俺は歳と共に定食屋に入っていった。

席に座り出された緑茶を飲みながらメニュー表を見る。

「心咲、今回は贅沢していいんだぜ、お前の晴れ舞台後の祭りだからな」

歳の言葉にありがたみを感じるが、俺からしてみれば……

「サンマの塩焼き定食お願いします」

「この期に及んで結局健康志向かよ!!」

「この時期に獲れるサンマはうまいんだよ、旬の焼き魚程の一品はは無いんだぞ」

「お前結果的に魚類と野菜しか食べないのかよ。ブレないなあ」

「歳はどうするの？」

「チキン南蛮定食、白米大盛りだ」
俺と歳はその後定食を食べながらスマホゲームに熱中していた。その一方では……
和菓子屋　穂むら
「ううっ、後３５ページもある……気が遠くなってきそう」
「穂乃果、あなたが生徒会の仕事をそっちのけで遊んでたのが原因でしょう。こうして私やことりも手伝ってるんですから早く終わらせましょう」
「穂乃果ちゃんが頑張ったら後でケーキ食べに行こうって約束したからには頑張らないとね。私も頑張るから」
「そうだよね、これもケーキの為……逃げる訳には行かないんだ」
「穂乃果は結局食べ物が無いと何もできませんね。先が思いやられます」
園田さんは呆れのため息をつくとまとめた資料にクリップを挟んだ。

１時間過ぎてこの仕事はお開きになり高坂さんたちはケーキ屋さんに足を運んだ。その頃高坂さんが向かっているケーキ屋さんではあの３人が集まっていた。
「心咲護、相当手強い相手ね」
「だから言ったやろ、そもそも心咲君は女の子に囲まれてても普段からアプローチが少なすぎるんや。多少話すだけで他に自分から一緒に出掛けるような事が無い、明らかに

じれったいと思わへん？」
「あの、希は何を考えてそれ言ってるの？」
　東條先輩と矢澤先輩の言葉についていけない絢瀬先輩は少し戸惑っていた。
「心咲君は必要最低限の関りしかしてないでしょ、可愛い服を着てもほめるだけで何もしてこないし途端のラッキースケベもあんまりしっくりこないでしょ。男なら攻めるが勝ちなのにあれだけアプローチしても効果今一つの状況なの。それが納得いかないの!!」
「まあ、あれだけの潔癖症を汚すのは難しいと思うんや、本人も女子が嫌がるような事をせえへんやろ。それはそれで安全と言うか。えりちはどう思うんや？」
「本人が嫌がる事はやらない方が良いと思う、本人だって望まないことは嫌なはずだから私は何もしなくてもいいと思うな」
「にこっち、残念だけどもう諦めた方が良いかもしれへんな」
「ぐぬぬ、まさか男一人誘惑するだけでこの世界一可愛いにこにーが敗れる事になるなんて……」
（結局にこは何がしたかったんだろう）
　一つ疑問が出来た。
　翌日　学校　スクールアイドル部にて

「大分寒くなってきたニャー。」
「ちなみに今年は低気圧が凄まじいので防寒着とカイロは必須ですね、とはいえ私はもう使ってますが」
　手にカイロを握る園田さんの手を近くに居た矢澤先輩が触れる。
「あったかいニコ～」
「人の手で暖を取るのもどうかと思いますが……」
「そういう穂乃果は何故幸せそうな顔してるんですか?」
「心咲君のジャケット姿に見惚れてるんよ、何でも穂乃果ちゃんからのリクエストらしいんやけど……」
「その裏にはどのような思惑が」
「心咲君のジャケットに顔をうずめてその匂いで一人オナ……」
「そんな破廉恥な事をさせる訳にはいきません!!」
「何!!急にどうしたの海未ちゃん!!」
　穂乃果が我に返ると園田さんはどこから出したのか模造刀を持っていたが1年生3人が必死に止めていた。
　そして学校が終わり、お開きになったが絢瀬先輩に問題が……
「あちゃー、降ってきたんだ」

唐突の雨である、それほど大きくは降ってない。
「鞄でしのげるよね、このぐらいなら」
絢瀬先輩は鞄を頭に乗せて走り出した、濡れていく制服に違和感を感じつつ家に向かって行く。ただその街角の喫茶店で俺はその様子を見てしまった。そして仕方なく……
「しょうがない、助けてやるか」
そう言って俺は絢瀬先輩の後を追った。
「はあはあ、結局たどり着けないか」
近くの建物で濡れた服を絞るとケータイで天気予報を見た。
「流石にそう早くは止まないわね、どうしよう……」
「災難でしたね、大丈夫ですか？」
「心咲君、何でここに……」
「さっき見かけたんですよ、服も髪も大分濡れてますね」
すると寒い中にも関わらず俺はジャケットを脱ぎ、絢瀬先輩に渡した。
「いいの？」
「女の子に風邪を引かせたくないだけです。そのジャケットをフードもついてるから雨もしのげます。気を付けて帰ってくださいね。それと……」

すると俺は絢瀬先輩の耳元でこう呟いた。

「先輩には期待してるんです、俺も先輩に会えないのは寂しいので……」

その瞬間絢瀬先輩は何かに打たれたような感覚が走った。そうして去っていく俺を見ながらただ絢瀬先輩は顔を真っ赤にしたまま動けなかった。

第１９話　心咲としての条件

寒さが本格的になり、俺は最近ジャケットにこだわるようになってきた。
あの後絢瀬先輩はちゃんと帰れたけど俺は寒さを堪えながら帰る事になった。
唯一の救いは絢瀬先輩は風邪を引かなかったことだろう。
正直俺は絢瀬先輩に期待している、ツイッターのアンケート調査で絢瀬先輩が人気の高いミューズメンバーだから今後の活動では絢瀬先輩のビデオを作る予定なのだがテーマはまだ決まってない。
でも同時に自分からあまり話す事が出来ない。理由は当然、
（美人過ぎて滅茶苦茶話ずらい……）
この一択である。
純情系殺しの身体と美貌には俺自身にとってもストライクなのだ。
普通の男子だったらウインク一つでやられるのは当たり前。
そう思いつつ着替え終わった後に財布とスマホを胸ポケットに入れた。
朝食とコーヒーを楽しみつつジャズ音楽を聴き流していたら突然インターホンが鳴り響いた。

「こんな朝から誰だ？」
　扉を開けるとそこには……
「心咲君、おはよう」
　制服姿の南さんだった。朝から俺に会いに来るなんて一体どうしたんだろうか。
「あら～ことりちゃんが護に会いに来るなんて～どうしたの急に？」
　南さんは手に持っていた紙袋を俺に渡す。中に入っていたのは……
「お弁当？」
「以前心咲君が私の家に泊まった時に私の料理をおいしいって言ってくれたから、後心咲君お昼ごはんはサンドイッチしか食べないでしょ。だから作ってあげたの。心咲君が喜ぶ顔が見たくて……」
　俺は南さんの心遣いに感謝しつつこう答えた。
「ありがとう、南さんが作ってくれたのなら、絶対おいしいよ」
「護、良いお嫁さんを持ったわね～この罪な男め～♡」
「誤解招く様な事言うな！」
「心咲君はちゃんと好きな人がいるから私は別に愛人ポジションですけど」
　そんなこんなで登校後
「……」

スクールアイドル部の部室でストーブに当たりながら上の空の絢瀬先輩。
部室の入り口で何が起きてるのか分かってない東條先輩に矢澤先輩は鋭い目つきで言った。
「なんか物凄いピンク色の気配を感じるんだけどどうしたんだろう」
「ウチの占いも面白い結果が出とるんよ、えりちがこの様子やと……」
「十中八九男の可能性って事ね」
すると矢澤先輩は何にもなかったような顔をして部室に入った。
「エリー、入るわよ」
「おはよう、寒かったでしょ」
「まあね、それより昨日は傘持ってなかったみたいだけど帰れたの？」
「何とか帰れｔ……」
その瞬間脳裏に昨日の出来事がフラッシュバックした。
無意識に顔が赤くなるとそれを隠す様に視線を逸らす。
「ははーんその様子だと昨日何かあったわね」
「えりち、乙女の顔になっとる。かわええなあ」
「希、何言ってるの!!」
「恥ずかしがらずに話してくれへん、昨日誰に惚れたんや？」

逃げ場の無くなった絢瀬先輩は昨日起きた事を全て話した。
その惚れた相手が俺である事を知った東條先輩は頭を抱えてこう思うのだった。
（心咲君からしてみればまた本人の悩みが出来てる事になるんやな。でも引き下がる事は今回出来んかもしれん。まあこれはこれで面白いんやけど）
すると矢澤先輩は下心を含んだ笑みを浮かべ絢瀬先輩にこう伝えた。
「言っとくけど心咲君は強敵だよ、それなりに準備が必要になるの」
そう言って矢澤先輩はある場所のパンフレットを突きつけた。
そのパンフレットの中身を見た絢瀬先輩は……
「これは……どういう事？」
「週末にジャケットを返す名目でデートしてきなさい」
「デ、デートーーーー!!」
その日の夕方の俺の家では……
ガチャ
「学校帰りのシャワーは最高だな。この後は今週のラブチューンズでも読んで……」
ピローン
ラインの通知を受け取った俺はスマホを見ると……
「え……」

一瞬全てが吹き飛んだように思えた、絢瀬先輩からのラインなのだがその内容は……

『昨日ジャケット貸してくれてありがとう。もし迷惑じゃなかったら今週末に渋谷へデートに行きませんか？』

「俺が……あの……あの絢瀬先輩とデートって……」

思考が追い付かない、渋谷へデートってあの絢瀬先輩が俺を誘うなんて。

とりあえず断る事も思いつかなかった、ラインに返信を出す。

『絢瀬先輩のお誘いであれば一緒に行きましょう。楽しみにしてます』

俺はその後終始手が震えていた。あの絢瀬先輩とデートに行こうなんて夢じゃないかと思いつつ眠りについた。そして迎えた土曜日。

秋葉原駅の前で俺は缶コーヒーを片手に絢瀬先輩を待っていた。

そして聞こえてくるあの声が……

「お待たせ、寒くない？」

「いや、全然。このエリアは比較的あったかいので」

「じゃあ渋谷まで行くけどどの電車か分かるかな？」

「ばっちり調べましたよ。こっちです」

だがここで気づいた、俺が絢瀬先輩の手を掴んでるのを。

「心咲君、結構大胆なんだね」

「す、すみません」
　そして背後には
「この初々しい感じ、たまらへんなあ」
「序盤からリア充全開ね、後を追うわよ、行こう」
　秋葉原から渋谷まで２０分電車に乗り目的地に着く。
「かなり人が多いな、流石は渋谷」
「ここから5分歩いた場所に行きたい場所があるの」
「じゃあはぐれないように、俺に掴まってて」
　すると絢瀬先輩は腕に掴まり歩いていた。
　至近距離で絢瀬先輩の香りがダイレクトに。
　街行く人からしてみれば俺たちカップルだと思われている。
　調子が狂うがここは空気を読んであえて無言を貫いた。その一方で……
「この後の心咲君の反応が楽しみやな～」
「ここまではスムーズに進んだけど心咲君どんな顔するかな。ヒヒヒ」
　俺と絢瀬先輩がやって来たのは渋谷のとある学生街。だがここの看板を見た瞬間
……
「ここって……カップルストリート……じゃないですか？」

その看板の名前通り、周りは恋人だらけであり俺が到底入る事の出来ないヘブンだった。

俺は絢瀬先輩に顔を赤くしながら確認する。

「絢瀬先輩の行きたい場所って、ここなんですか。何かの間違いじゃ……」

「何言ってるの、心咲君と私はここに行くのよ、一日ぐらい付き合ってよ」

俺は頭の中で理解に苦しんでいた、ただ俺は理性を保つ事に精一杯で街を歩きながら辺りを見回していた。

すると絢瀬先輩は俺の服の袖を引っ張った。

「あのアクセサリーショップ行ってみようよ」

俺はとりあえずキャラメルで脳をリセットして入店する。

ショーケースに入った指輪やネックレスを見ながら呟いた。

「ペアルック前提にアクセサリーが大半だな、しかも値段もそこそこする」

そして俺は店を出ると……

「心咲君、それカッコイイね」

俺の指にはアメジストに翼の意匠の指輪を購入した。

絢瀬先輩はガーネットの髪飾り、俺は絢瀬先輩に笑顔で髪を撫でた。

「すごく可愛い、俺好みだ」

「あ、ありがとう」
顔を赤くして照れる絢瀬先輩を見て思った。
（俺って誰が好きなんだっけ？）

途中で分からなくなった。
俺の本命の相手、ていうかしれっと俺とんでもない事してるような、俺ってここまで女癖悪かったっけ。
クソッなんだこのジレンマは。
「心咲君？」
「な……なんでございましゅか」
「あの店ガーデンサンドのお店なんだけど、行ってみない？」
とりあえず何か食べて考え直すことにした。
俺はオニオンシュリンプサンドとコーヒーを口にしつつ今の状況について考察したが何の確証も無い。
店を後にして入口の噴水広場にある事を聞くために向かった。
「少し話でもしますか？」
俺は絢瀬先輩にコーンポタージュの缶を渡して話を切り出した。

「どうしたの急に？」
「絢瀬先輩には、俺がどう見えてますか？」
「え……」
「友達としての俺か、それとも異性としての俺か」
　その瞬間絢瀬先輩はドンピシャだったのか物凄く真っ赤になっていた。
「その様子だと、俺は異性として見られていた訳か。参ったな」
　近くで傍観していた東條先輩が頭を抱える。
「このパターンはもう駄目やん、心咲君の洞察力が発動した時点でこれはもう……」
「マズイ……」
　正直言うべきか迷ったが、わかってもらうには少々残酷だ。
　それでも現実を突きつけないとこっちも気楽に終われない。
　俺は絢瀬先輩に自分の本心をを伝えた。
「結果的には……すみませんでした」
　絢瀬先輩はその言葉で結果を察した。
「俺、好きな人がいるんです。ずっと近くに居てくれて……自分の存在意義を教えてくれた、幼馴染が好きなんです」
「そっか……心咲君、穂乃果の事が……」

「はい、今の自分にとって高坂さんは大切な存在なんです。全てが終わったら……高坂さんに想いを伝えようと思います。本当にすみませんでした」

その言葉を聞いた絢瀬先輩は沈む夕焼けを見ながら俺に呟いた。

「近くに居るだけでも……」

「いいよ、俺の近くならいつでも」

絢瀬先輩の涙に俺は少し心を痛めていた。

第２０話　決戦前夜の約束

「ラブライブの特別パーティー？」
渡された招待状に俺の名前が入ってるのを確認する。
まさか本戦前夜にパーティーとは粋な計らいだがステージに立つ事の無い俺が何故呼ばれたのか。
俺はそれを知るために矢澤先輩に連絡した。
「あ、矢澤先輩。少しお話いいですか？」
「いいわよ、丁度こっちもゆっくりしてる所だから」
「今どこにいるんですか？」
「お風呂だけど」
「ゴフゥ!!」
電話の向こうでお風呂に入ってる事を知った俺は思い切り吹いてしまった。
「ははーん、心咲君は真面目に見えて童貞的妄想を抱えてるようね、ムッツリ君にこ」
「俺はそういう類に関しては断固否定だよ!!」
「じゃあ、世界一可愛いにこにーがイヤラシイ音立てながら喘いでるファンサービスを

したら心咲君も元気に……」
「女子の潔癖を大事にしてください!!」
そう言って俺はポケットのキャラメルを取り出して口にすると本題へ切り出した。
「それよりも、俺の家にラブライブパーティーの招待状が来たんだけどこれって俺も参加しないといけないのか?」
それに対しての回答は……
「そのパーティーはラブライブの関係者なら男でも参加できるわよ。実際男性コーチも数は少ないけど参加するぐらいだから普通に心咲君も行けるんじゃないかな」
その言葉に少し安心した俺は矢澤先輩に礼を言いつつ眠りについた。
「ねえ、心咲君は私の事は好き?」
「友達としては……好きだけど?」
「じゃあ、もしその友達としての好きが消えたら」
すると高坂さんは俺を押し倒して強引に俺の喉に舌を入れてきた。
状況を理解できない俺の瞳に映ったのは淫らな顔をした高坂さんだった。
「友達関係は終わり、これからは私を恋人として愛してね」
そして高坂さんは音ノ木坂の制服のシャツのボタンを外して俺の腕を自ら胸に触らせた。

「私の身体は……心咲君の物だから滅茶苦茶に……」
「出来るかーーーーーーーーーーー!!」
布団を投げ飛ばし朝一番の絶叫と共に迎えた朝だった。
「朝からショッキングな目覚めだな、高坂さんはあんな事しないはずだ。絶対に……絶対に……」
こういう場合は案の定キャラメルで頭をリセットした。
土曜日前の金曜日の学校に向かいつつ明日のパーティーの事を考えながら学校の日課をこなしていた。
学校が終わると同時に俺はＵＴＸ学園の目の前にやって来た。
アライズのライブ映像を眺め、呟いた。
「アライズを超えて、音ノ木坂を救ってやらないとな」
すると後ろから……
パシャッ!!
突然、自分に向けられたカメラのフラッシュに少し驚いてしまった。
「急にすみません、ミューズの総監督の心咲護さんですよね?」
そこにはカメラとメモ帳を持った１人の少女がいた。
いきなりの事に俺は尋ねる。

「急に写真を撮るなんて、非常識極まりないですが誰ですか？」
「ＵＴＸ広報部の物です。言ってしまえばネットブログで様々の事を伝えている部活の一つ。当然アライズ関係の情報も広めてるんですよ」
つまり早い話が高校生のマスコミ、とは言えインタビューは予選後からかなりの数受けてるから別に迷惑な話じゃないのだが……
「話になら出来る限り、引き受けよう」
すると少女は顔を明るくし、俺は１時間のインタビューを受けた。
内容は大会前の意気込みや楽しみ、ミューズを結成した経緯など、話せる限り答えた。本人も満足そうにしていた為、話に乗って正解だと思った。
それからＵＴＸのブログを覗いてみた。当然俺のインタビューも乗っておりコメント欄には俺の頑張りを称賛する声が上がっていた。
自営のツイッターにもコメントがたくさん寄せられており、本戦を前に俺の心は昂っていた。
そして俺はツイッターに返信をして眠りについた。

そして本戦前日のパーティーへ
「まさかホテルを貸し切って行うとは鳥肌物だな」

ホテルの案内図を見つつ西木野さんが俺に対してニヤリとしていた。
何か不穏な物を感じるがどうしたのだろう？
「このホテルはローズガーデンがあるようね。夜はライトアップもあるから退屈することは無さそうね」
そしてパーティーの会場に入る。
そこには豪華な食事とドレスを着た全国を勝ち抜いたスクールアイドルが集まっていた、他にも大人ではあるが男性も少なからずいた。
安心しつつ渡されたグラスに注がれたドリンクを持って、ミューズのメンバーと合流した。
「心咲君、遅いよ～」
「バスの方が早く着いたのに何で拒否したのよ!!」
「女子だらけのバスに男が乗れるわけないじゃないですか!!」
「結果的に私が車を用意して送る事になったけど本人なりの心遣いだと思ってちょうだい。帰りも私が乗せていくわ」
「西木野さん、ありがとうございます」
そうこうしてる間にパーティーの挨拶が始まった。
話に耳を傾けながらグラスを掲げて乾杯の合図と共にドリンクを飲み干した。

各地域のスクールアイドルが様々な話題を話す中、俺はテーブルの野菜サンドを口にしていた、ミューズ達も楽しんでるだろうとそう思ったのだが……

ミューズに近づいてきた別のグループ、紛れもなくアライズだった。
「どうも、ミューズの皆さん。この度は本戦出場おめでとうございます」
「綺羅ツバサちゃんから私たちを祝ってくれるなんて……」
「いえ、あなたちが負ける前の最期の言葉です」
空気感が突然変わる、そう穏便には済まないようだ。
「音ノ木坂という時代遅れの遺産に何故あなたたちは執着するの？余りにもくだらないと思うんだけど」
「何それ!!音ノ木坂を救おうとしてる私たちに対する嫌味!!」
「寧ろ音ノ木坂の生徒を誘ってるんです。あっても意味のない学校よりも未来の保証されるＵＴＸに入学すればこんな事しなくても有名になれるのに」
「酷い……音ノ木坂をそんな風に見ていたなんて……」
そしてミューズに指をさして笑みを浮かべたツバサは指を下に向けた。そして言い放った言葉が……
「土下座して、出場を辞退しなさい。そうすれば楽になるわよ」

「信じられない、これがスクールアイドルとか……」
　その様子を見ていた俺はアライズの前に向かった。
「スクールアイドルなら分かり合えると思ったんですが、まさかここまでの下衆とは正直失望しました」
「心咲護さん、怖い顔をする事無いのよ。あなたは特別な才能を持っている。でもその才能を活かせる人材がミューズには居ない。ＵＴＸに入ればあなたの才能を欲する最高の人材がいるのよ。人気も名誉も欲しいがままに出来るのに何故ミューズなんかにその才能を使うの？」
　その言葉に俺は容赦のない言葉を使う事にした。
「過去を捨てた挙句、偽りの幸福を弄ぶ、自分を過信したが故に愚かに堕ちた物ですね。どうやらあなたはスクールアイドルの中でも一際悪魔の様ですね」
　その言葉にツバサは顔を冷たくした。
「面白くない、ＵＴＸは楽園。欲しい物、憧れた物、やりたい事が全部叶う場所なのに」
　俺はグラスにジュースを注いで呆れた言葉を正してやった。
「過去を捨ててまで楽園に手を伸ばし、それで堕落の先で手に入れた未来は……１００円にも満たないウィスキーと同じですよ」
　綺羅さんは言葉を理解し何も言わずにその場を後にした。

「心咲君……」
「勝とう、ひっくり返してやろう。この大舞台で」
その後パーティーの終わる1時間前
「ローズガーデン、確かに薔薇だらけだ」
俺は高坂さんに誘われてローズガーデンを眺めていた。
だが高坂さんが凄い不機嫌そうな顔で話を切り出す。
「心咲君、以前絵里ちゃんとデートしたんだって。真姫ちゃんから聞いたよ」
「言い返せないな……」
「結局、私の事相手してくれないじゃん!!この浮気者!!」
俺は何も返せなかった、本気で高坂さんが怒ってる事を理解したから。
「もっと……私を見てよ……」
俺は高坂さんの肩を自分に寄せて本心を語った。
「ずっと一緒に居たいとは思ってた、でも俺はミューズを導くのに精一杯で……高坂さんの近くに居てやれなかった。ごめんな、こんな弱い俺で……」
「ありがとう……私にとっての心咲君は……弱くて怖がりで世話焼きの心咲君だから」
そして俺は高坂さんに聞いた。
「大会後、何でもやりたい事に応える。何がいい?」

「私も、デートに連れてって欲しいな……」
「分かった、約束する」
　その様子を見ていた東條先輩と西木野さんの二人は意味深な表情で俺と高坂さんを見ていた。それに気づく事も無く……

第２１話　王の祝福

遂に迎えた本戦当日。
楽屋のテレビで他の学校の演技を見ながらポップコーンを口にしていた。
最終調整を終え、俺はただ信じるだけだ
ミューズを、すると俺の元へ一人のスーツ姿の男性がやってきて声をかけた。
「君が心咲護君だね、話は聞いてるよ。」
「えっと……あなたは……」
男は名刺を取り出し、俺に渡した。
「ラブライブ運営委員会人材発掘部門、赤峰浩太」
「僕はラブライブで優秀な人材を見つけて将来活躍する歌手やプロデューサーを育てる仕事をしているんだ。君は１７歳の身でありながらラブライブに出場するアイドルを指導して予選を２位で通過した。まさしく奇跡の逸材。実に興味深いよ」
「ありがとうございます。自分でもここまで来たのは本当に辛かったけど。そう言ってもらえると嬉しいです。正直……」
「実に謙虚だ、若者は純粋とはよく言った物だよ。果たして君は、７冠王のアライズを超

えられるか楽しみだよ。期待してるから頑張り給え」
　そしてテレビに目を向けると……
「来たか、アライズ」
　研ぎ澄ました感覚をテレビに向ける。
「その実力、見せてもらいますよ」
　静かな始まりと同時に赤と黒の衣装、テーマはハリウッドとプログラムに書かれており、思い切った歌唱力と大胆なパフォーマンスを見せる。
　だが自分はそれを見ながら衝撃を受け呟いた。
「真っ黒だ、これは……誰かの為のパフォーマンスじゃない!!」
　席を立ち、拳を握りしめた。
「こんなの……ただ自分の存在を見せつけてるだけじゃないか!!」
　俺は席に戻ると同時に頭を抱えた。
「俺の知ってるアライズは……もういない……」
　今のアライズの本質を見た俺は意を消して叫んだ。
「許さない、あの歪んだ自己顕示のようなスクールアイドルが１位とか、俺は認めない!!」
　初めて知ったアライズの闇、俺は正直失望した。

だが引きずっている訳にはいかない。
俺はミューズの出番の１０分前にミューズにメッセージを送った。
ミューズの楽屋
「心咲君からメッセージだ。アライズの事は忘れろ、彼女たちは俺たちの知ってるアライズじゃない。本番、必ず成功させろ」
そのメッセージと同時にミューズもステージに上がっていった。
そして本番直前。
集まった俺たちはミューズに最後の言葉を残した。
「皆、ここまで来たのは全て皆の頑張りがあってこそだ、優勝して音ノ木坂の名前を伝えよう、全力を期待する」
そして俺はライブ開始の合図を出した。
「ミューズ」
「ミュージックスタート!!」
そして始まった、ミューズのステージ。
俺は彼女たちの歌声と振り付けをノートでどれだけ書き記したことか。
バラバラだったものが一つになった時の美しさ、自分が求めたアイドルが今、目の前で歌ってる。

華やかな彼女たちを見届けると同時に、演技が終わった。
大歓声とサイリウムが広がる会場を後にした。

その後もライブは続き、俺はそれを見ていた時楽屋の外から声が聞こえた。
赤峰さんと綺羅さんだ。その会話を聞いてみたら……
「何故、何故私がランキング４０位なのよ!!」
「理由はわかってるはずだ、君はスクールアイドルの栄誉を手にしたと同時に自分中心のパフォーマンスを行った。その上傲慢な目で他のスクールアイドルにモラルに反した言葉を言いつけたと。数名のスクールアイドルから報告があったぞ」
「私はスクールアイドル頂点よ。あんたなんかに何と言われようと私がトップである事に変わりはない」
「君には期待していたが、残念だよ。ここまで堕落したスクールアイドルになるとは」
そして俺はその会話に割って入った。
「人の頑張りを否定する事はその人の人生を否定するのと同じです。あなたは何かの為に頑張る事をしませんでしたか。努力をしないで手に入れた功績と栄誉に意味なんてない。俺だったらあなたに言うべき言葉は一つ。他人を否定すればするほど、いずれ訪れる残酷な結末から逃げる事すらできなくなっていくんですから」

綺羅さんは何も言い返せない状況に陥っていた。そして俺は追い打ちをかけた。
「負けを認めてください、もう分かっているはずだ。これ以上反論も嘘も通じない事も。それでも認められないなら……いくら女でも、許すつもりは無い」
綺羅さんはその場にしゃがみ込む。そして俺に告げた。
「私の負けよ……自分以外のスクールアイドルを認められなかった。このライブ後、UTXで全て謝るわ」
その様子を見た赤峰さんは俺に少し苦笑いで聞いた。
「心咲君は結構静かに見えてはっきり言っちゃうタイプなんだね」
「言っときますけど間違いを正す事が出来る人がいなかったら俺もミューズもここには居ませんから」
すると赤峰さんは満足気にこう言った。
「そろそろ結果発表だ。ステージに行こう」
赤峰さんの後ろ姿を見届けながら俺はしゃがみ込む綺羅さんに手を出した。
「一緒に結果を見に行きませんか」
「この私を……」
「以前の綺羅さんはもういない、そう気づいてるので」
俺は綺羅さんの手を繋ぎ、結果発表の場に向かった。

　そして結果発表、ラブライブの赤峰さんが会場の前に立つと俺は額に少し汗を感じた。
「それでは、今年のラブライブのランキング結果、４０位から2位までの順位を発表します。」
　そしてモニターに映し出されたのは約４０にも及ぶ学校にスクールアイドル部の監督の名前、だがここで気づいた。
「俺たちミューズの名前が……無い!!」
　すると赤峰さんは指を鳴らすと、ミューズに照明が当たった。
「今年の優勝チームは、ミューズ!!今ここに新しい伝説が刻まれた瞬間である!!」
　すると会場が湧きあがり、ミューズに声援が送られた。
「それでは、ミューズの監督である心咲護君とミューズのリーダーである高坂穂乃果の二人に優勝旗とトロフィーが贈られます。そして監督である心咲護君からの優勝の言葉を」
　俺は優勝旗を天に掲げて翻し、マイクに向かって想いを伝えた。
「今自分がここにいる事は、奇跡だと思っています。ここまで来るのに様々な困難を経験し、ミューズの皆が支えあって俺に夢を見せてくれた。そのおかげで何も無かった自分に光をくれたミューズは俺にとって大切な仲間、そして友達です。そしてこの会場に

いる皆に伝えたい。ありがとう!!」

会場に歓声が響き、それと同時に赤峰さんが俺の横に立つと会場に一つの言葉が響いた。

「心咲護はこのラブライブの大会において、若き者が9人の女神を導いた。心咲護はこれまでのラブライブにおいて17歳の高校生がチームを優勝に導いた稀代の高校生。僕は彼をラブライブにおけるスクールアイドルの王として今後の彼に期待するとしよう。正に今、王の名を持つ心咲護が完成した。王に祝福を!!」

すると会場は俺とミューズに声援の祝福で広まった。すると赤峰さんは俺に笑顔で答えた。

「これから君の影響でラブライブは更に進化する。これからもよろしく頼むよ」

俺はそれに対して……

「ラブライブの王、悪くない気がするな」

そしてライブが終わったその後……

お台場公園

「本当に優勝できた。こんなに嬉しい事他に無いよ、ねえ心咲君」

はしゃぐ高坂さんに俺は少し実感がわかない顔で

「正直驚いたよ。俺達が優勝したことに、夢じゃないと思うと鳥肌が止まんないや」

「心咲君も早く受け入れなよ。ホントの事なんだからさ。」
「そうだな、俺達は優勝したんだ。目指した舞台で……」
「あ、それと約束のデート、楽しみだね」
「そうだな、俺も楽しみだ」
一つの夢が叶い、そして冬がやってくる。

第２２話　恋愛的共感覚

１２月　フランス　パリ

「やあ、元気そうじゃないか。高坂君」

「おかげさまでな、丁度店が落ち着いたからフランスまで来たものの結局お前の所に来てしまうな、心咲」

喫茶店で話し合うこの二人は、俺の父さんと高坂さんの父さんである。

実は俺が高坂家と出会った理由は俺の父さんに紹介されたのが縁である。

父さん達は小学校時代からの親友で同じ大学の卒業生。

お互い信頼を寄せる関係の二人はフランスと言う異国の地で再会したのだ。

「ところで高坂君、護が最近穂乃果とまた出会うようになったそうだね。何でもラブライブと言う大規模な大会で優勝したとか」

「最初は無理だと思ってたよ、止めたりもしたがお前の息子を信じる一心で反抗したから許してやったけどお前の息子はやってくれたよ。あんなもやしみたいな奴が一転してとんでもない頑固さと潜在能力を見せるんだから底知れない恐ろしいやつだと思ったよ。お前みたいにな」

「確かにあの性格と潜在能力は僕に似たのかな。護は守られる側から人を助ける勇気を持っている。それは恐らく、穂乃果の影響が大きいだろうね」
「でも、二人の今を見ているとそろそろ考えなきゃいけない年頃だと思うんだよな」
「僕の家はいつでも彼女を迎えられるよ。護もそれが一番の幸せじゃないかな」
「穂乃果もそれは同じだろうな。何せ穂乃果自身も護が大切な人だと言ってたからな」
「それなら高坂君と少し語りたい。今夜例の店で飲まないか？」
「良いだろう、仕事終わるまで待ってる」
　そして日本では
「ＵＴＸの謝罪会見、とりあえず言うべきはスカッとしましたね」
　ファミレスに集まる俺と南さんと園田さん。タブレットでＵＴＸの謝罪会見を見た俺たちは心に引っ掛かった物が無くなった気がした。
　それに対して南さんが俺に目を向けた。
「心咲君ってもしかしてこの謝罪会見に関わってたりするのかなって思って？」
「ことり、心咲さんに変な疑いをかけないでください」
　それに対して俺は軽く話した。
「その件については少し関わっていると言ってもいいかな？」
　俺は事情を説明すると園田さんは苦笑いした。

「結構リアリスト且つ容赦無いですね……」
「心咲君かなりバッサリ切り捨てるね」
「間違いを正す事に情けは要りませんから」
二人は安心したのか笑顔を向けると俺も自然と笑った。
そこで南さんがある質問をしてきた。
「ところで今週土曜日のクリスマスは心咲君どうするの？」
俺はその質問に対してこう付け足して話した。
「誤解しないで欲しい話だけど……高坂さんと高級ホテルのスイートルームで一泊するんだ」
「え、えええええええええっ!!」
ファミレスに今日一番の悲鳴が上がった。
遡る事2日前
「高級ホテルのスイートルーム!!」
「心咲君と穂乃果に私からのささやかなご褒美よ」
電話の向こうで西木野さんがニヤリとしているのが想像できる。おのれ天性の小悪魔。
「そもそも何で俺と高坂さんなんですか？」

「あなたの言ってた事は全部知ってるのよ。穂乃果とデートに行く約束してたわね」
あの時の会話全部聞かれてたのか。迂闊すぎた……
「これはあなたたち二人を想ってのプレゼントよ。スイートルーム以外にも夜ご飯もオーダーしておいたから優雅なクリスマスを過ごしてね」
電話が切れると俺の心には仕組まれた罠に嵌ったネズミのような感覚が残っていた。
問題はこの事がバレたらミューズから思いっきり変な目で見られるのは勿論、からかわれる可能性だってある。
特に東條先輩からあらぬ質問を聞かれるだろう事は簡単に想像できた。
でもせっかくのクリスマスを二人だけで過ごせるというのなら悪い話ではないとは思う。
俺はこうしてベッドに飛び込んだ。
そして現在、和菓子屋穂むら
「心咲君と高級ホテルでお泊り……真姫ちゃんがご褒美だって言ってたけどそれって私の気持ちに気づいてるって事だよね？」
ベッドの上でぬいぐるみを抱きながら考える高坂さん。
すると高坂さんは服の入った引き出しを開けて着替えながら鏡の前に立つ。
「心咲君を独り占め出来るなら……いっその事夜に……」

以下高坂さんの妄想

「心咲君……私の身体、好きなようにしていいよ……」

「高坂さん、後戻りできなくなるのはわかってるね」

「いいよ、心咲君の全てを私に……」

「心咲君の指が、私を……気持ちいいよ、心咲君」

「高坂さんはもう誰の物でもない。俺の物だから、その純潔。俺に捧げてくれ」

「私はもう、心咲君の物だよ。もっと私に心咲君の跡を付けて……」

「お互いの純潔を捧げあって、私も心咲君も幸せに……」

「思春期まっしぐらだねぇ、お姉ちゃん心咲君の事になるとエッチな事考えちゃって」

「ゆ、雪穂!! いつからそこに!!」

「ベッドにいる時からずっと見てたよ。ご丁寧に破廉恥な下着まで着始めて」

「さっきの事全部忘れてーーーーーーー!!」

「うっ、何だ、この妙な寒気と嫌な感覚は……」

自宅に帰ると俺は部屋に戻った後ギターを手にして楽譜を見ながら音を奏でた。

そしてクリスマス当日　六本木にて

「まさか西木野さんが目的地まで車を用意してくれるなんて、心遣いに感謝しないとな」

「心咲君とホテル泊まるの楽しみだね。退屈はさせないから」
すると高坂さんは俺に耳元で囁いた。
「夜の私の姿、楽しみにしててね」
その言葉に俺は薄々何が起こるか察しはついた。
一応俺は高坂さんに伝えた。
「あんまり過激な格好は遠慮してほしいな」
そして目的地に着くと俺は受付を済ませて俺と高坂さんの泊まる部屋へと向かった。
解放的な部屋には様々な設備がある他この部屋はまさかのダブルベッドだった。
俺はそれを知るや否や高坂さんに目を向ける。
「高坂さんは、大丈夫なのかな？」
「私は、心咲君と一緒に寝るなら別にいいと思うよ」
本人はそう言ってるが俺はいまいち覚悟が決まりきってない。
女の子、それもまだ告白もしていない好きな人と同じベッドで寝る事に俺はまだ抵抗がある。
俺はとりあえず高坂さんと食事に向かった。
高級ホテルらしくかなり贅沢な料理だった。
西木野さんは俺の好みに合わせてメインは魚にしてくれた。

それ以外にもスイーツにわざわざコーヒーを付けてくれた西木野さんの心遣いがありがたかった。

部屋に戻る前にクリスマスツリーを眺めると高坂さんの首に着けていたペンダントが揺れて俺の視界に入った。

「そのペンダント、まだ持ってたんだ」

すると高坂さんはペンダントに触れて思い出を語った。

「このペンダントは毎年クリスマスになるとよくつけてるの。心咲君のクリスマスプレゼント、これだけは絶対に手放したくない大切な物だよ」

俺の中で嬉しさの余りポケットに入っていたフォトケースを取り出した。

「俺もこれ、高坂さんのクリスマスプレゼントは常に持ち歩いていた。何て言えばいいのかな、この気持ち。何か大事な感情だと思うんだ。これを手放すのが怖いくらいに」

すると高坂さんは俺に寄り添うように抱き着いた。

「私も、心咲君と離れるのは怖いよ……ずっと一緒に居たいって思うと何もわからなくなって、心咲君の優しさを求めちゃう……でも心咲君がことりちゃん達と一緒に居るのを見ると心が黒くなって、私は……」

それに対し俺は高坂さんの頭を優しく撫でた。

「高坂さんは俺の事をそんなに想ってくれるのなら、俺もそれが一番嬉しい。いつか、こ

の気持ちが自覚出来たら。その時に自分の答えと想いを伝えたい」

「私は、いつでも待ってるよ……」

第２３話　望まぬ終わりと不可思議な女神

「ここは……どこだっけ？」
気が付けばどこか高級さを感じる部屋。
赤い布のベッドに机には英語表記のドリンクとグラス。
刺激的なフレーズのジャズ。
ここで俺は忘れていた事を思い出した。
「そうだった、ホテルに泊まったんだった。未だに現実味が無いな」
そう言って俺は左を振り返ると高坂さんが眠っていた。
俺は高坂さんを起こさないようにベッドから抜け、備え付けのコーヒーメーカーでエスプレッソを抽出するとそれを飲みながらスマホでニュースを確認していた。

その出来事から数日後、一年が終わろうとする中で……
「えっ！西木野さんの家でカウントダウンパーティーですか」

「ミューズのメンバーを誘って私の家で皆で新年を迎えようと思ってね、是非心咲君にも参加してほしいと思ってるの。都合は良いかしら」
「参加させてもらいますよ、皆で新年を迎えましょう」
「最高の料理をそろえて待ってるわ、紅白歌合戦もみんなで楽しみましょう」
　会話を終えると俺はワクワクした気持ちと共にスマホで紅白に出演するアーティストの楽曲を聞きながらギターを掻き鳴らした。
　その頃ファミレスでは園田さんと南さんが集まっていた。
「もうあと少しで一年が終わりますね。思い出せば今年は夢の様でした、これもきっと心咲さんと穂乃果の始めた無茶な夢が現実になったんですからね」
　園田さんはそう言うとレモンティーをストローで一周させつつスマホのライブ映像を凝視した。
　南さんはその様子を見てこう返した。
「今年は心咲君に出会えて良かったと思ってる。心咲君がいなかったらミューズもラブライブ優勝も無かったと思う。そして何より……」
　園田さんはここで南さんの雰囲気が変わるのを察した。
　そして南さんは言葉を続ける。
「心咲君が本気で私を必要だと言ってくれた事、私は凄く嬉しかった。心咲君に何か恩

を返すを事が出来なくても、心咲君に名前で呼んでくれた事も一緒に一夜を過ごした事も、

今思い出すと……儚い……な……」

園田さんは顔を真っ赤にしつつ南さんの手を握った。

「十分返せてると思いますよ。ことりが近くにいる事で」

そして園田さんは心の中である言葉を呟いた。

（心咲さんがみんなに好かれる理由は……きっとあなたの優しさなんでしょうね。心咲さんは本当に罪な男ですね、純粋すぎる故に……）

心咲自宅

「……」

イヤホンで音楽を聴いてどれ位経っただろうか、俺は布団の上でラブソングを聞いて優越感に浸っていた。

喉の渇きを感じた俺はスマホを止めてヘッドホンを外した。

リビングへ向かうと冷蔵庫からアイスコーヒーを取り出した。

ホットもいいが喉の渇きを癒すなら当然アイスコーヒーに限る。

俺はコーヒー楽しみつつバタークッキーに手を伸ばした。

その翌日、パーティー当日の大晦日。
俺はミューズのメンバーと初詣に向かった、だが周りからは謎の嫉妬の目を向けられる。
誤解があるようだがただの友達である。
偏見駄々洩れの目を向けないでくれと心の中で思っていた。
「心咲さん、何やら顔色が悪いようですが大丈夫ですか」
園田さんが心配してくれると同時に俺は笑顔で問題ないと意思表示した。
「ところで心咲君は今年何をお願いするんや？」
東條先輩とその他メンバーの悪意のある笑顔に対して俺が出した言葉が……
「高坂さんとずっと一緒にいられますように。かな……」
その瞬間高坂さんが真っ赤になりながら心咲に対して意味を聞くと……
「ああ、幼馴染だから、一緒にいるのは当たり前だと思うんだよね」
そして俺は賽銭箱に小銭を入れると皆で手を合わせた。
その後俺たちは西木野さんの家に行く前におみくじをを引いた。
すると俺は引いたおみくじを見ると……
「中吉……」
まあ普通と言えば普通だった、だが内容を見ると……

「一歩を踏み出す勇気を持てば、大切な物が自分を受け入れてくれる」
その言葉に俺は……
「まさかな……」
俺はそう呟くと高坂さん目を向けた。
そして俺たちは西木野さんの家に着くと机に並んだ料理に少し舞い上がる。
そして俺はグラスに注がれたドリンクを手にすると……
「それじゃあ、一年の終わりにカンパーイ!!」
グラス音が響くと同時に俺はドリンクを飲みつつテーブルにあるホットサンドを口にした。
一年の間の思い出話に浸り、俺はこの時間の中で思い出していた。
高坂さんに出会ったあの春を……
そして紅白歌合戦が始まり俺は白組の応援をしつつ名曲の数々皆で楽しんだ。
そして気が付けば元日まで後１０分前、西木野さんが温かい年越しそばを持ってくる。
そばを食べながら西木野さんがある事を尋ねた。
「心咲君はいつ伝えるの、自分の気持ち?」
「そうやすやすと伝えられたら伝えてるよ」

「じゃあ何故ためらってるの？」
「それについては、答えられないかな？」
「後悔の無い選択を願っているわ」
そして元日５秒前
「皆、そろそろカウント行くぞ!!」
俺は指を立て５秒カウントした
「５・４・３・２・１!!」
その瞬間時計の無機質な音が響き皆で叫んだ。
「ハッピーニューイヤー!!!!」
皆が互い新しい年を祝福した。
その後このパーティーは朝まで続いた。

そして冬休みが終わって１ヶ月、ある一つのイベントにミューズのメンバーは心をときめかせていた。
そのイベントの日まではそう遠くは無かった。

第２４話　彼女は求め、俺は迷う

冬休みが終わり、気付けば2月。
俺は歳と智樹の3人でバーガーショップで放課後を謳歌していた。
実は音ノ木坂は現在卒業式に向けての準備があり、ミューズのメンバーはしばらくの間俺と関わる事が少なくなる訳で久しぶりに神城寺の友人と集まっていた。
俺は注文したタルタルフィッシュバーガーを食べつつ無言を貫いていた。
俺の中で頭を悩ませるのは勿論南さんの言っていた自分を大切にしてくれる人。
一年経った今でもそれは分からないまま、それが明確にならない限り俺は高坂さんに気持ちを伝える事すら出来ない。
今年の春に必ず伝えたい。高校最後の年を後悔の無い一年にする為に。
今の自分に残された時間は少ない。必ず俺が……
「護先輩、さっきから真剣に何を考えてるんですか？」
智樹のその言葉に今の自分に気が付くと俺は少しはぐらかす様に答えた。
「大切な人について……かな」
すると歳は物凄く悪意の満ちた笑顔をして俺を弄り始めた。

「心咲にも恋多き季節がやってきたのか、心咲の事だからミューズのメンバー９人とお付き合いしてたり……」
「誤解があるけど俺はそういう事しないし不純にも程があるよ!!」
　それに続き智樹も歳と同じポジションに入り、追い打ちをかける。
「つまり護先輩はミューズの誰かの事を考えながら悶えたりしてるって事ですね。一体何を妄想してるのか見ものですよ。歳先輩も気になりますよねぇ」
「教えてもらおうか、どんな妄想に浸ってる?」
　もはや見る影も無くやましさと男の本性が見えてしまってるが俺はその勘違いに関して真剣に訂正した。
「歳や智樹にとっては面白いかもしれないけど状況は深刻極まりないんだ。言っとくけど俺には高坂さんと言う心に決めた相手もいるんだから他の女子に手を出したりしないよ」
「だったら、早く告白すればいいのになんでしないんだよ」
　心の中では言わないようにしていた言葉を言う事になる。
　それを察した俺は流石に嘘をつきたくない為に話す事にした。
「誰かは分からないけど、俺に想いを寄せてる人がいる。ミューズの誰かだと思うけど、俺にはその存在が足枷になってるんだ。その子が誰か分からない限り、俺は前には進め

ない、そう思ってる」
「つまり三角関係の恋愛って事か。まるで深夜の恋愛ドラマみたいなシチュエーションだな」
「護先輩は性格や体つきから考えて女性にモテますからね」
「今年の俺達は多分負け組だな。心咲はぶっちぎりの優勝確定だ」
「は？」
歳の言葉を理解できなかった俺は歳に何の事を言ってるのか聞いた。
「負け組って何の負け組の事を言ってるんですか？」
「２月のビッグイベント、バレンタインデーまで後３日なのにお前知らなかったのかよ」
「バレンタインデーって明後日だったっけ？」
すると智樹は呆れたため息をつき、俺に腹部に無言のツッコミを入れた。
「ぐっ!!」
「護先輩、大事な日だけはちゃんと覚えていないと命取りですよ。時には日付を確認してください。」
「おーい心咲、生きてるか～」
「いくら何でも腹を殴る事無いだろ……」
そして帰宅後……

ザアアアアア

風呂場でシャワーを浴び水を止める。

風呂場から出ると俺は保湿クリームを腕に塗るとパジャマに着替えて自室へ戻り、恋愛雑誌のラブチューンズに手を伸ばす。

雑誌には当然バレンタインの特集が組まれ、読んでるうちに思ってしまうのが……

「読んでいて恥ずかしくなってくる……」

本来ならこの雑誌は自分が読み始めた訳じゃなく、南さんに紹介されて読んでいる雑誌であり、リア充専門の雑誌と言える代物である。

俺はあくまでこの雑誌を参考書として読んでるので別にこういうのを求めてる訳じゃない。

俺は雑誌を閉じて眠りについた。だが布団に潜った際、ふと思い出した言葉が……

「助けられてた……思えば俺が友達を優先するようになったのって高坂さんに会えなくなった後だったっけ？」

翌日の朝　スクールアイドル部の部室

「明日はいよいよバレンタインデーニコ☆」

「年に一度の想いを伝える赤いリボンの１日」

「そして私たちがここまで導いてくれた心咲君にありがとうを伝える日」
「まさに絶好のチャーンス!!」
「今日は一段と元気やね」
「この元気さがもう少しいい方向に行くと私は苦労しないんですが……」
「それよりも穂乃果ちゃんが若干ソワソワしてるニャー」
「い、言わないでよ凛ちゃん。こっちだってその……」
「心咲君の本妻やからね。未来の」
「の、希ちゃんそれ言わないでぇ!!」
　小さくなる高坂さんに対して希はフォローを入れた。
「皆は心咲君の事を友達として大事にしてるんよ。ただ穂乃果ちゃんだけ心咲君と結ばれる事が許されたんよ。皆も穂乃果ちゃんの事応援してるんよ」
「もちろん私は心咲さんにチョコを渡しますよ。友達として」
「じゃあ心咲君にチョコ渡す人、手を挙げて」
　その結果は……
「全会一致ですね」
「そう言えばことりは心咲君の家の場所知ってたわね？」
「皆で行くの迷惑じゃ……」

「じゃあ、伝えたい事メッセージカードに書いてチョコをまとめて穂乃果ちゃんに届けてもらおうよ!!」
「私が届けていいの？ことりちゃん」
「二人きりになってチョコを渡したいんですよね、私たちに構わず穂乃果は伝えたい事をちゃんと伝えてください」
「皆、ありがとう」
　そして翌日　バレンタイン当日
「歳先輩良かったですね、チョコレート貰えて。しかも３つ」
「いやー危なかったよ。負け組になるところだった」
「僕も２つ貰えましたからね。満足です」
「ただ一番の大物を抱えてるのは心咲だな」
「今頃チョコレートを大量に手にしてると思います」

　その頃心咲の自室では……
　ピンポーン!!
　インターホンに反応し俺は玄関へと向かう。
　目の前にいたのは高坂さんだった。

「心咲君、これ、ミューズの皆から心咲君に」
「ありがとう、すごく嬉しい……よ……」
突然高坂さんは俺を押し倒し、高坂さんは淫靡な顔で胸元のボタンを外す。
まるで俺を誘惑する様に息が荒くなる。
俺はこの状況を止めるために高坂さんを抱き寄せた。
「高坂さんが俺に対してどんな感情を持ってるのか分からない、でも、高坂さんが俺にこんな事するのは、まだ早いと思う。だからやめてくれるかな?」
「ごめん、心咲君に触れたくて……いきなり……」
俺はもう決めてる、高坂さんを選ぶと、だけどまだ伝えるべきじゃないと思ってる。
「家にあがってよ、少し高坂さんと離れたくなくなった」
いつか伝えるまで、高坂さんと……

第２５話　存在の証明

卒業式まで後1週間となった2月、俺は秋葉原駅周辺をただひたすら歩いていた。
パーツ屋を抜け、アイドル専門ショップの多いエリアに来ると新しくできた店の前で止まる。
その店はミューズの関連アイテムを取り扱ってるらしくその店の張り紙を見た時後ろで自分に声をかけられた。
「久しぶりだね、この店気になるのかい？」
声をかけたのはラブライブ運営委員会の赤峰浩太さんだった。
俺は赤峰さんに挨拶しつつこの店について聞いてみた。
「お久しぶりです、この店ってミューズのアイテムを取り扱ってるみたいですけどどういった理由で俺たちの商品が並んでるんですか？」
「日本全国にはラブライブが店と提携してスクールアイドル関連のメディアミックスを行ってる。その際ラブライブは企業を繋いでオリジナルグッズを開発と販売を行いつつラブライブを世に広めているんだ。目の前の店もラブライブの提携店舗の一つだよ」
余り実感が湧かないけど俺たちはここまで有名になっていた事に少し心の中で驚い

ていた。
赤峰さんは俺を見ながら何故か嬉しそうだった。
恐らくミューズと言う新しいアイドルがトップに立ったのが余程嬉しかったのだろう。
俺は赤峰さんと店を商品を見ながら記念に何個か買う事にした。
そこで赤峰さんはある事に気づく。
「君は彼女、高坂穂乃果に何か思い入れがあるのかい？やけに彼女のアイテムが多いじゃないか」
「幼馴染なんです、自分にとって大切で、スクールアイドルをやるきっかけになったのは高坂さんの唯一の願い、それを叶えようと思ったからそれで……」
赤峰さんはその言葉を聞くとある言葉をかけた。
「君にとって高坂穂乃果の存在は君の鋼の意思、大空の様な夢を叶える要因になった理由と言う訳か。とても素晴らしいと思うよ」
「ありがとうございます」
「もう一つ聞こう、君は高坂穂乃果にとって幸せな存在として側にいる事が君にとっての理想だと私は思う。君はこの先彼女とどうありたいんだい？」
「高坂さんは俺にとって離れたくない存在です。自分は高坂さんを守り続けるのが自分

の存在理由であり、自分が信じ通す信念でもありますから」
　赤峰さんは満足した顔で俺に今後のエールを送った。
「必ず幸せにしてみせなさい、私も君を応援する。後悔の無い今後を祈る」
　赤峰さんはそう言って帰っていき、俺は買ったアイテムの袋を抱えて帰路へとつき、帰宅後コンビニのドリップコーヒーを飲みながらテレビを見た。

　翌日　とあるケーキ屋にて
「カップチーズケーキとバニラクッキータルト、南さんの家に向かうついでに奮発しちゃったけど喜んでくれるかな？」
　店を出て南さんの家に向かう俺は南さんから俺に想いを寄せる存在の事を聞くためにお茶会の話を昨日していた。
　最初こそ南さんは驚いてたけど理由を話すとすぐ納得してくれた。
　これで前に進める、高坂さんに手が届く。
　そう思いながら歩きつつ南さんの家の前にやってきた。
　入る前にキャラメルを一つ口にしてインターホンを鳴らす。そして扉が開くと……
「いらっしゃい、心咲君」
「どうも、なんていうか、無茶な話しちゃったけど……いいのかな？」

少し苦笑いすると南さんが笑顔で受け答えてくれた。
「そんなことないよ、心咲君が悩んでるの私は分かってたから。とりあえず上がって行って」
「ありがとうございます、それとこれ、お茶菓子のケーキなんですけど」
「このケーキ、新しいお店の、わざわざありがとう!!」
「いえ、手ぶらで行けなかったのは俺の都合ですから」
家にあがると目の前にコーヒーとバニラクッキータルトが出された。
俺はコーヒーを口にすると南さんに本題を切り出す。
「それじゃあ、教えてください。俺に想いを寄せてる人について」
南さんはそのことについて話す前にある事を聞いてきた。
「心咲君にとっての幸せ、それは誰を選ぶ事が心咲君にとっての幸せなの?」
俺にとっての幸せは、高坂さんが笑顔でいられる事以外に望む幸せは無い。
そう思った俺は南さんに今まで打ち明けなかった本心を打ち明けた。
「俺の想い人は……ずっと昔から決まってて、離れていた間ずっと会えることを願ってた。俺が好きなのは高坂さんただ一人です」
その言葉に南さんは嬉しそうな表情で俺の肩を掴んだ。
「おめでとう、心咲君。両想い……だね」

その言葉に俺はまさかの愕然としていた。
「まさか……想い人の正体は……」
「穂乃果ちゃんも心咲君の事が大好きなんだよ。心咲君の願いは叶ったんだよ!!」
俺は高坂さんが好きで高坂さんは俺が好き。
俺の恋は、ずっと前から叶っていたんだ。
俺はその事に気付かせてくれた南さんの頭を撫でて伝えた。
「ありがとう、必ず幸せになる」
「頑張ってね、心咲君」
それから卒業式前日の日、俺は音ノ木坂の前に来ていた。
「お待たせ、心咲君。話があるって？」
俺は写真ケースを見せて伝えた。
「卒業式の終わった夜、あの桜の公園で会おう!!」

俺に迷いは無かった。

第２６話　桜の軌跡

卒業式当日　音ノ木坂　スクールアイドル部　部室

ガチャ

「ここに来るのも最後やな」

東條先輩達３人が部室に入る、儚げな雰囲気が漂う中、絢瀬先輩は答える。

「私達にとってのミューズ、ここでの忙しい毎日がもうないと思うと寂しいわね」

「ちょっとしんみりしすぎじゃない、卒業したって会えなくなる訳じゃないんだからもっと笑顔になりなさいよ。ほら、にっこにっこに～」

この空気を変えるべく持ちネタで場を和ます。

「にこっちの言う通り、最後は笑顔で締めくくる方がええと思う」

「そうね、会えなくなる訳じゃ無い。そう考えると少し楽だわ」

そして部室の扉が開く、やって来たのは……

「みんな、集まってたんだ」

「思い出にでも浸ってましたか、随分笑顔じゃないですか」

「卒業式までの時間にここに来るのは気づいてたけど」

「穂乃果ちゃん、それに皆も」
　高坂さん達が入ると同時に小泉さんが呟く。
「ここに集まれるのはこれで最後ですかね」
　寂しそうな小泉さんに絢瀬先輩は迷いの無い言葉を掛ける。
「最後じゃないわ、いつでも会える。ミューズのメンバーがいる限り」
「そうですね、また会えると信じていれば」
　明るさを取り戻した小泉さん、その傍らで高坂さんはあの言葉を思い返していた。
「卒業式の終わった夜、あの桜の公園で会おう!!」
「いいけど……何か、理由があるの？」
「伝えたい事がある、高坂さんに対する迷ってた俺の答えを」
（まさか……心咲君は私の事を……）
　止まらない胸の鼓動と妄想で何も考えられなくなっていた。すると……
「さっきから目まぐるしく穂乃果ちゃんの頭の中が回ってると思うんやけど、何かあるん？」
　その言葉で高坂さんは顔を赤くし、涙ながらに東條先輩に視線を向けた。
「べ、別に何も考え事なんて、えへへ……」
「穂乃果、じっくり話を聞かせてもらうニコ」

やましさ全開の顔で高坂さんを問い詰める。
そして高坂さんは事情を話すと……
「まさか心咲君が夜の桜の公園に呼び出すなんて」
「伝えたい事があるって明らかに告白だニャー」
「で、でも告白かどうかはまだ分からないしどうしたらいいんだろうと思って……」
「心咲君が来てほしいなら行くべきです。今回は私達も自重してますから」
園田さんのフォローで高坂さんは落ち着きを取り戻して意を決した。
「私行く！心咲君が伝えたい事は全部受け止める!!」
「穂乃果ちゃんファイトだニャー!!」
盛り上がる中、時計の針を見ると……
「そろそろ卒業式の目前ですね体育館に集まりましょう」
それぞれの場所に戻り、卒業式へと向かった。

卒業式始まる合図、ゆっくりとした歩きで卒業生が入って来る。
椅子に座る南さんは絢瀬先輩と東條先輩、そして矢澤先輩の姿を見ながら少し涙を浮かべていた。
全員が入場し終わると先生の言葉が綴られ、その言葉は辛くもあり勇気を感じる言葉

だった。
そして次に卒業証書が渡される。絢瀬先輩が卒業証書を受け取る手は心なしか震えておりこれを受け取る事は今までの自分の思い出と決別する事に他ならなかった。

卒業式が終わり、退場していく3年生を送り出した高坂さん達はその後の時間に西木野さんの家に集まった。
最後にお祝いしたいと西木野さんがお菓子を取り寄せていた。
そのパーティーには案の定、俺も呼ばれた。
お互いが思い出話に花を咲かせる中、俺はコーヒーを飲みつつ高坂さんに視線を向ける。
すると南さんが俺の隣に座ると同時に俺に例の件について聞いてきた。
「桜の公園の事、ようやく伝えると決めたんだね」
「卒業式の夜に伝えたいってそう決めてたから」
俺は空のカップにコーヒーを再び注ぎ、南さんに小声で伝えた。
「南さんおかげで前に進めたから凄く感謝してるよ。ありがとう」
南さんはとても嬉しそうにこう返す。

「私は心咲君を近くで見守っていただけなのに、結局いつの間にか助けてた。あの時の事に少しでもお礼を返すことが出来たかな？」
「十分返せてるって前に言ったじゃないですか」
「それもそうなんだけど私に出来る事しか心咲君に何も返せてないから……」
「でも、俺が高坂さんの本心を知るきっかけを作ってくれた南さんだからこそ、俺は感謝してる。それだけで俺は十分だよ。後は俺自身が頑張るだけ……気持ちを伝える夜だ」
「心咲君、必ず穂乃果ちゃんを幸せにしてね」
「必ず幸せにする、任せてくれ」
もう迷いは無い、自分が決めた相手に気持ちを伝えるんだ。必ず……
「カスタードケーキ取って来るよ」
そう言って席を離れてカスタードケーキを取りに行くのだが……
「あの……心咲……君……」
高坂さんがかすれた声で俺を呼ぶ。
「ちょっと、二人きりになれない……かな？」
俺の回答は当然……
「わかった、少し部屋の外に出よう」
そして俺と高坂さんはパーティーの場から外れると西木野さんの家の庭までやって

来た。
「急にごめんね、ちょっと場が苦しくなっちゃって……」
「そっか、俺はちょっと舞い上がっててさ、少し落ち着こうと思ってた」
そしてお互い……
「……」
（いつもは成立する会話が成立しない、どう話を振るべきだろうかさっぱりわからない、この空気を変えるには一体どうすれば……）
二人きり以前に何を話せばいいのか考えるべきだった。
完全に失敗だった。
一度この舞い上がっている自分の感情をリセットするべくキャラメルを取り出し、口に入れた。
だがこの先、高坂さんはとんでもない行動に出る。
「!!」
突然俺の腕を掴むと同時に制服の胸元のボタンを外す。
そして掴んだ腕を強引に胸に突っ込んだ。
「な、何やってるんですか、高坂さん!!」
すると高坂さんは俺の腕を離し胸元のボタンを閉じた。

「一体、どんな意図があってこんな……」
「単純に触って欲しかった、だってことりちゃんや絵里ちゃんと家に泊まったりデートしたりしたんだから私も少し嫉妬してた。でも今のでやっとスッキリした。心咲君に触られたら少し今まで抱えてた憑き物が落ちた」
俺にとっては逆セクハラだったが高坂さんの想いを何となく理解できた。
嫉妬されるほど俺を近くで想っていた事は正直嬉しさの反面少し怖く感じた。
そして気が付けば夕日が沈みかけていた。
パーティーが終わり、皆が帰路につく頃に俺は高坂さんと例の桜の公園に向かっていた。
そして公園に着くと一本桜がライトで輝いていた。
「この桜の公園で会えた事、今思い出すと嬉しすぎて……」
「思い出すと俺も嬉しかった、そして一年……高坂さんにずっと伝えたかった言葉がある」
すると俺は高坂さんと面を向かい話し始めた。
「俺は高坂さんとこうして再会するまで、見える目標は何も無かった。高坂さんがあの日に俺と再会してスクールアイドルを目指し始めたその時に思ったのが高坂さんの願いを叶える事、俺の中で初めてできた夢だった。でも次第に高坂さんという時間の中

で、高坂さんに魅せられてた。自覚していたけど、高坂さんの夢に為にずっと言えなかった。でも今なら言える」

俺は写真ケースを見せて高坂さんに伝えた。

「君の事が大好きだよ、穂乃果ちゃん!!」

すると高坂さんはその言葉を聞き、涙ながらに答えた。

「私も大好きだよ、護君!!」

分かりえた俺と高坂さんは抱き合った。

「よろしくね、護君」

「こちらこそ穂乃果ちゃん」

お互いは唇を5秒間重ね合わせた。

そして高坂さんはあるお願いをする。

「離れたくないから、心咲君の家に泊ってもいい？」

「いいよ、俺も離れたくないから……一緒に……」

最愛の人の夢を叶え、最後に結ばれた俺の物語。

きっと……この愛は消えることはないだろう。

手に入れた幸せは、俺の中で輝いてるから。

END